

THE COMPLETE FIRST SEASON

THE Peke FILES

Little Mustapha

LMB Entertainment

"the Peke Files "

the Complete 1st Season

Book #4

Little Mustapha

主な登場人物

オックス・モオルダア・ムスタファ

FBI（エフビーエル）特別捜査官。自称優秀な捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決……するの？

苦手なものとはたくさんあり過ぎてここには書ききれない。

始め彼の名前は「オックス・モルダア・ムスタファ」ですが、諸事情により、#005 「殺人豆」から名前が変わります。詳しくは本編を参照。

ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官（無免許）でもある。

自分はセクシーでゴージャスであると言い張っている恐怖の女。

アンタモ・スキヤナー

FBI副長官。モルダアたちから指示を出す人。モオルダアをおどかすことに情熱を燃やしている。チョコレートと塩辛いものが大好き？

毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

怒百目鬼 鐵円（ドドメキ テツマル）

謎の人物。時々登場する予定。

始めは警部の肩書きで登場する予定だったが、それだと話がややこしくなるので取りやめに。今のところ全てが謎に包まれている。

ウイスキー・ドリンキングマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。

その他

エピソード毎に紹介。

#009 後門の狼

1

エフ・ビー・エル、ペケファイルの部屋

モオルダアは椅子の背もたれに寄りかかって憂鬱な表情をして座っている。いったい何が気に入らないのか解らないが、彼は先程からずっとこんな感じなのである。

モオルダアは思っていた。「どうしていつもこんな風なんだろう？ いったい、いつになったらボクはハツとするよ
うな美女と冒険に満ちた捜査を繰り広げることが出来るのだろうか。それに今回の事件だって……」モオルダアの自問
はここで妨げられた。スケアリーがドアを勢いよく開けて部屋に入ってきたのだ。

「モオルダア。事件ですよ」
いきなりドアが開いたことにモオルダアはちよつと驚いていたが、それがスケアリーであると解ると彼はまた憂鬱な感
じに戻った。

「ああ、知ってるよ。これのことでしょ」
モオルダアは自分の前にあった書類をスケアリーに見せた。

「そうですね。でもあたくしには解りませんわ。どうしてこんな事件をあたくし達が捜査しなくちゃいけないんです
の？ 事件と言うよりは事故ですわ。男性が野犬に襲われて亡くなったんでございましょう？ それなら、その野犬を
捕まえてしまえばすぐに解決ですわ」

スケアリーはモオルダアの予想どおりの反応を示している。ここでスケアリーに事件の異常さを説明するのがモオルダ
アの楽しみでもあるのだが、今回はそうでもない。

「これは野犬の作業ではないよ。以前にも似たような事件があったんだけど、まさかボクらが捜査するとは。まったく
悪夢だね。以前の事件で殺された被害者の検視結果によると、遺体に残っていた歯形は犬のものではなかったんだよ」

「あら、それじゃあ、クマか何かですか？」
「それなら、まだ良いけどね。歯形の特徴からそれがオオカミのものであると解ったんだよ」

モオルダアはまだ浮かない顔をしている。スケアリーはモオルダアのこの様子になんだか調子が狂ってしまいそうだ。

「犬もオオカミも似たようなものですわ。それに日本のオオカミはもう絶滅しているんですよ。これは絶対に野犬の仕業ですわ。……モオルダア。もしかして狼男だなんて言うんじゃないでしょうね」

スケアリーはここでモオルダアが嬉しそうに狼男の話が始めるものだと思っていたが、モオルダアは静かにクビを振っただけだった。

「狼男ならまだ良いんだよ。スケアリー。キミはコウモンの狼、というのを知ってる？」

「知っていますわよ。前門の虎、後門の狼。あたくしぐらいのインテリならそのくらいは知っていて当然ですわ。一難去ってまた一難って意味ですわね。でもそれがこの事件とどんな関係があるって言うんですの？」

「まったく関係がないよ。ボクが言ってるのはその後門じゃないんだ」

ここでモオルダアは少し間を取った。なんだか話を続けるのがイヤなようだ。

「ボクが言っているコウモンって言うのは、人間の肛門のことなんだよ」

こう言ってモオルダアはため息をついた。なるほど、こんな事件では美女が登場するはずはない。モオルダアの憂鬱の理由が解ってきました。

「人間の肛門と狼にどんな関係があるっておっしゃるの？」

スケアリーはモオルダアの言っていることがまったく理解できていない。

「関係があるとか無いとか、そういうことじゃないんだよ。コウモンの狼が人を襲ったんだよ。ここにコウモンの狼に襲われて一命を取り留めた人の証言があるんだ。それによると、犯人がズボンを脱いでそれから後ろを向いて下着を降ろしてお尻の肉を左右に広げると、そこには恐ろしい狼の顔があつて、それが牙をむいて被害者に襲いかかってきた、ということなんだ」

モオルダアがこの話をしていると、部屋中に嗅ぎたくない臭いが充満しているような気分になってくる。スケアリーは無意識に鼻をつまんでいた。鼻をつまんだまま喋っているスケアリーが変にこもった声で言った。

「あたくし、そんな話は信じませんけど、その人を襲ったのが動物じゃなくって人間だと言うことは確かなようね。狼がどうのって言うところは、多分恐怖のあまり記憶が間違っているんですわ」

「キミはボクらがこの事件の捜査をするべきだと思おう？ ボクとしてはなんとなくイヤなんだけど」

モオルダアは、どう考えても美女の登場しないこの事件の捜査はしたくないようだ。

「捜査はすべきですわ。この犯人を捕まえて、コウモンの狼がいらないということを証明すればいいというだけなんです」

から」

モオルダアはこの答えにガッカリしていた。こんな汚い話にスケアリーがのつてくるとは思っていなかったのだ。それにこういう場合「コウモンの狼」に遭遇するのはモオルダアだけで、後からスケアリーにいくら説明しても信じてもらえない、ということになるに決まっている。

「モオルダア。ぐずぐずしている暇はありませんわよ」

スケアリーがモオルダアを引っ張って部屋を出ていく。

「ホントに行くの？」

モオルダアはこれから起こることを想像して思わず鼻をつまんだ。

この先はあまりに下品な話が続くため公開できません。一応、結末だけを書いておきましょう。モオルダアの少女的第六感によつて何とかコウモンの狼を捕獲することに成功。捕まえてみるとコウモンがオオカミなのではなくて、人間に寄生するオオカミがコウモンから顔を出していたのだということが解った。

この後しばらくモオルダアはもの凄い悪臭を放っていたため、彼に近づく者は誰もいなかった。

スケアリーがコウモンの狼を調べたところ、生物学上それは犬に分類されるということだった。幻のニホンオオカミの発見とはいかなかった。しかし、ニホンオオカミが人間の肛門から発見されて誰が喜ぶというのだろうか？

#010 前門の虎

1

夜道

多情野凡太は平凡な大学生。テニスサークルの飲み会を終えたタダノは、夜も更けて人のほとんど通らない道を彼のアパートへと向かって歩いていった。タダノは一人でニヤニヤしながら歩いている。ちょうどいい具合に酒が回っているのだろう。ニヤニヤ、ニヤニヤ。明日は何して遊ぶうか。さつきからそんなことばかり考えている。彼はあと二年して就職活動が始まるまで、遊んで暮らせるのだから。平凡な大学生なんてそんなものである。

ニヤニヤ、ニヤニヤ。彼は細い路地に入ってしまった。この先をもう少しいくと彼のアパートにつく。路地には街灯も少なくこれまでの道よりも暗い。タダノがこの路地を歩いていると、電柱の影から若い女の声がかえってきた。

「ちよいと、旦那。お待ちになつて」

タダノは急に話しかけられて驚いたが、声でそれが若い女性であると解ると立ち止まった。

「何ですか、ボクに用ですか？」

タダノは声をした方を振り向いた。しかし電柱の影になつてその顔はよく見えない。彼は目を細めて電柱の方を覗き込んだ。可愛い子だったら良いなあ、とタダノはほろ酔いの頭の中に声の主の顔を想像した。しかし、可愛い子だったら何だというのか？ 平凡な大学生にはそんなことは関係ない。夜道で見知らぬ女に話しかけられて、その後その女性と何か良いことがあつたりして……。そんな妄想をするだけで彼は楽しいのだ。

「そこにいるんでしょ？ 暗くてよく見えないよ」

タダノが暗闇をじつと見つめていると、一瞬その闇の中の人物の両目がきらつと光った。タダノは驚いて声をあげそうになった。

「ウフフツツ。どうしたの？ 驚いた顔して」

これを聞いてこわばっていたタダノの顔がまた元のニヤニヤに戻った。なんとなく色気のある声だ。タダノはそんなことを思った。

「いいにおいがしていますね。旦那」

それにしても、どうしてこの人は自分のことを旦那と呼ぶのだろうか？ タダノは変な感じだったが、それがまたおかしくもあった。ここは彼の通う大学の近くである。もしかしたら、知り合いがイタズラをしているのかも知れない。

「いいでしょ、これ。このコロンで世の女性陣はボクにめろめろなのさ」

タダノがふざけてみたが、闇の中の女性は何も反応を示さない。

「コロンじゃないのよ。私が言っているのは、あなたの肉の臭いのことよ」

そういうと闇の中でまた両目が光った。タダノはどうしていいか迷っていた。これはとてつもなく嬉しい話なのか、それとも自分は頭のおかしい女に絡まれているだけなのか。或いは、これは友人達のイタズラで、ここで自分が変な行動を起こしたら物影から友人達が現れて自分が大笑いされるのだろうか？ 彼が黙っていると、また闇の中から声がした。

「さあ、もつと近くにいらして。旦那」

タダノは少し怖くなってきた。このまま立ち去ることは簡単なのだが、なぜか闇の中の女性が気になる。闇の中から聞こえてくる声には、どこか抗しがたい魅力を感じるのだ。

せめて顔だけでも見ておきたい。タダノはこう思つて一歩前に出た。すると闇の中の女は彼の腕をつかんで自分の方へ引き寄せた。タダノはなぜか少しも抵抗することなく女の腕に抱かれていた。なぜか彼にはそうすることが自然なことのようにも感じられた。ビルの屋上から飛び降りたら下に落ちていく。そんなことと同様に、これも自然の法則なのだ。

女の背丈は彼とほぼ同じくらいだろうか。彼の目の前にはその女の顔があるはずなのだが彼の目に入ってくるのはギリギリ輝く目だけである。彼はその目の奥に吸い込まれていくような感じがしていた。

この瞳の奥には底なしの闇がある。「自分はこの不思議な魔力の虜になったのだ」これは、タダノがどうしてこの女のすることに抵抗出来ないのか、という彼自身の問いに対して出した答えである。もうこの混乱のために酔いは醒めてしまったのに、こんな答えしか見つからなかった。

タダノが女の輝く瞳を見つめていると、それはニコリと笑つたように見えた。タダノも無意識に軽く微笑んでいた。それから女はゆっくりと口を開けた。口の中には黄ばんだ鋭い牙がずらりと並んでいた。タダノはその牙に気付いてやつと我に返つた。慌てて女から離れようとしたが、女はもの凄いい力で彼をつかんでいた。いくらもがいても彼は女から離れることが出来なかった。彼が激しく動けば動くほど女の爪が彼の腕に食い込んできた。

女の口はさらに開いていき、やがてタダノの顔と同じ大きさまで開いた。どうしていいのか解らずに、ただ女の口が

開いているのを見ていたタダノだったが、ここまで来てやっと何とかしないといけない、ということに気付いた。何とかしないとどうなるか？ きつと、あの牙に噛み付かれるに違いない。

タダノは震えて力が入らなかったが、何とか息を吸い込むと叫び声をあげて助けを呼ぼうとした。しかし、彼の声があがる寸前、女はタダノのノド元に噛み付いた。タダノが出そうとした声は、彼の首に開いた穴から音にならずに抜けていった。彼は首から血しぶぎを上げていたが、それもしばらくすると止まった。それから彼は自分の流した血の中にばたりと倒れた。

2

都内のとあるブティック

スケアリーはエフ・ビー・エルに出勤する前にこのブティックでショッピングを楽しんでいる。・・・なんだかエフ・ビー・エルについていつ出勤してもいい自由なところみたいだ。

スケアリーが店内に並んだ服の中を歩き回って気に入ったスーツを手を取った。そこへさかさず店員が近寄ってきて商品の説明を始めた。

「お客様。そのスーツよりもこちらなんかどうでしょうか。こちらの方が体のラインがすっきり見えると思いますよ」

店員はスケアリーにより高価なものを勧めているのかと思ったがそうでもないらしい。どちらも同じような値段だ。スケアリーは店員の言うことには耳をかさずにまた別の場所へと移った。今度はブラウスを選んでみる。そこへさつきの店員がついてくる。スケアリーが薄紫色のブラウスを手にとると、店員はもつと濃い色のものを手にとってスケアリーに勧めた。

「お客様。その色よりもこちらの方が体が引き締まって見えますから、こちらの方がいいかと思えますけど」

この店員はスケアリーの手に取る商品をことごとく否定している。

「あの、失礼ですけど、あたくしは自分の服は自分で選びたいんです。ですからあたくしがこれ、と決めるまで黙っていただくさらない？」

スケアリーは少し機嫌が悪そうに言った。

スケアリーは手に取ったブラウスを元に戻すと今度はシャツがおいてある方へ移動した。そこで彼女は太い横のラインが入ったシャツを見ている。そこへまた店員がやって来た。

「お客様。そのシャツよりもこちらの縦に細いラインが入っているほうが痩せて見えますよ」

「お客様。そのシャツよりもこちらの縦に細いラインが入っているほうが痩せて見えますよ」

「ちよいと、あなた。さつきからあなたはあたくしをブクブクちゃんみたいに扱っていらっしやいますけど、それっていったいどういうことなんですか？ あたくしはこんなに……」

「あたくしはこんなにスリムなんですから。どんなものを着たって似合うに決まっていますわ。ですからあなたはいちいち余計なことを言わないでくださるかしら。せつかく買う気で来たのに、あなたのおかげで今日のこの店の売り上げが減りましたわ」

スケアリーはそう言うってから逃げるようにしてそのブティックを後にした。

3

エフ・ビー・エル、ペケファイルの部屋

モオルダアはつまらなそうに書類を眺めている。モオルダアは思っていた。「あゝあ……。あゝあ……。どうしていつもこんなことになるんだろう。いつになったらボクの優秀な捜査官としての本領が発揮できるような事件が起こるんだ？ そんな事件が起こったら、きつとボクはマシンガンの弾丸が飛び交う中も傷一つ負わずに走り抜けることが出来るはずなんだ。でも近くに美女がいる時は腕に傷を負うかも知れないな。そこで美女がそれに気付いて『まあ、ひどい傷！』とか言うんだ。そうしたらボクが言うのさ。『なに、こんなのはかすり傷だよ』って。そこでボクと美女の目と目が合う。そうするとその後には……」

スケアリーが入ってきた。しかし、今日はいつもよりも静かにドアが開いたので、モオルダアもあまり驚かずにすんだ。
「ああ、キミか」

モオルダアはスケアリーをチラッと見てからまた書類に目を戻した。それから一つ間をおいてモオルダアは何かを思い出したように再びスケアリーの方を見た。

「なあ、スケアリー。キミ最近なんだか・・・」
太ったんじゃないか、と言う前にモオルダアは慌てて口を閉じた。スケアリーはブティックでのこともあつてこういうことには敏感に反応する。

「最近なんだつて言うの、モオルダア。話を中途半端にするのはおやめなさい」

「いや、何て言うか、その。最近またいちだんと綺麗になったんじゃないの、とか、そんな感じ」

モオルダアは分かり易く嘘を言っている。しまった、またスケアリーの鉄拳がとんでくる。モオルダアは覚悟を決めて歯を食いしばっていたが、意外にもスケアリーは静かにしている。

「あらそうですの。それはよかったですわ。ところで事件なんでもございましょう。あたくし、最近温泉とかで休みすぎでしたから、そろそろ仕事をしないとけませんわ」

スケアリーのこの言葉でモオルダアは少し明るい気持ちになった。今回は臭い仕事はスケアリーにしてもらえるかも知れない。何しろ前回のコウモン事件でモオルダアはかなり臭い思いをしたのだから。モオルダアはスケアリーに事件の説明を始めた。それは前回のコウモン事件とそっくりだった。

「今朝タダノという大学生の遺体が発見されてねえ。それがただの遺体じゃなくて肉食動物に食べられた可能性があるんだよ」

「それつて、またコウモンの狼じゃありませんの？ それだったらあたくしはパスしますわ。前みたいにあなたが臭い思いをしてコウモンから狼を引っ張り出して退治すればいいんですよ。そのあいだにあたくしはフィットネスクラブにでも行っていきますから」

「えっ、そうなるの？ でもまあいいか。コウモンの狼は前回で絶滅したはずだよ。どんな狼ももう日本では見ることが出来ないつてことだよ。それに今回は少し様子が違うんだ。事件があつたのは大学の近くの住宅街なんだけど、付近の住民は遺体が発見されるまで誰もその事件には気付かなかつたんだ。これはちよつとしたミステリーだよねえ。どんな人間でも自分が食べられそうになつたら抵抗して物音を立てるはずだけど、誰も犯行に気付かなかつたなんて」

3

事件現場

「そんなことはどうでもいいですわ。あたくしは捜査で体を動かして余分な脂肪を燃焼させなくてはいけませんから」
スケアリーはつい本音を言ってしまった。モオルダアは気付いていたがそのことについては何も言わなかった。

「それじゃあ、早速捜査にかかりましょうかあ」
「そうしましょうかあ」

スケアリーは事件現場から少し離れたところに車を止めて車を降りようとしていた。

「ねえ、もう少し先に止めた方がいいんじゃないか？　ここからじゃ現場まで三百メートルはあるよ」
不審に思ったモオルダアがスケアリーに言った。

「いいんですよ。文句があるなら自分で車を買ってからにしてください」
こう言われると何とも言えなくなる。

スケアリーは車を降りて、すたすたと歩き始めた。両手を大きく振っている。これはウォーキングフィットネスの歩き方だ。モオルダアは仕方なく小走りに彼女を追いかけた。

二人は事件現場までたどり着いたが、もうそこには何もなかった。住宅街と言うだけあって、あまりに悲惨な現場をそのままにしておくのには少し都合が悪かったらしい。二人がついた時には一通り検分が終わって、路地一面に広がっていたタダノの血もきれいに洗い流されてしまっていた後だった。

「何ですのこれは。むごたらしい遺体と血はどうしたというんですの？　これじゃあ全然エキサイティングじゃありませんわ」

スケアリーは少し息を切らせながら近くにいた警官に言った。モオルダアはこの状況を嬉しく思っていたが、せつかく三百メートルも歩いてきたのに何も無いというのは少し気に入らない。

「あなた達はエフ・ビー・エルですわ」警官が二人を見て言った。

「しかしですわねえ。私どもの捜査にも決まりがありましてねえ。それに検分は十分にやりましたし、調べたいことがあ

れば署の方に行けば何でも解りますよ」

モオルダアは警官の言うことはあまり聞かずに辺りを調べている。警察が気付かない些細なことに気付くのが優秀な捜査官。そう思っているいろいろな調べてみたが、やっぱり何もなかった。モオルダアは遠くにある彼らの乗ってきた車の方を見てため息をついた。「またあそこまで戻るのか……」

よく見るとスケアリーはまた両腕を大きく振り回して車の方に向かって歩いていった。いったいどこへ行くのだろうか？ モオルダアは大声を上げてスケアリーを呼び止める気にもならなかったので、スケアリーの携帯に電話をかけた。電話が通じると二人はお互い見える場所しながら電話で話を始めた。

「スケアリー、キミは警察に行くんだろ？」

「そうですよ。捜査はスピードが第一ですから。あなたは何をモタモタしていらつしやるの。早くこちらに来ないとおいていきますわよ」

「いや、ボクは面倒だから車には戻らないよ。このまま大学に行つて被害者のことを調べてみるよ。車に戻るよりそっちの方が近いから」

「あら、そうですね。あなたももつと体を動かした方がいいと思いますわよ。でもあなたがそうしたいのならそれでいいですわよ」

話が終わる頃にスケアリーはすでに車に乗り込んで警察へと向かっていた。モオルダアは大学へと向かうことにした。しかし、モオルダアは大学で被害者の何を調べるといふのだろうか？ 本当は何も考えはない。とりあえずキャンバスをうろついてみることにした。そういえば、なんだかお腹空いてきたなあ。

4

大学内の食堂

モオルダアは食堂で昼食をとっていた。学食は安くて助かる。モオルダアは久しぶりにまともな昼食にありつけて満足そうである。いったいエフ・ビー・エルがどれだけの給料を彼に支払っているのかは知らないが、モオルダアは普段はろくに昼食にもありつけないほどに貧窮しているようだ。

モオルダアが満足そうに豚カツ定食を頬張っているところへスケアリーがやって来た。

「あら、あなたもここにいらしたの。捜査の方はちゃんと進んでいますの？」

スケアリーは手にトレーを持っていた。その上にはたっぷりと食事がのっている。

「あれ、キミいつの間ここに来てたんだ？ まあ、捜査の方は順調に…へへっ」

モオルダアは捜査などしていなかったのだが、いつもどおり適当にごまかしている。それよりもスケアリーの持っているトレーの方が気になる。

「キミ、それ全部一人で食べるの？ そんなに食べたなら、また…」

「また、捜査への活力が沸いてくるってことですわよ。あたくしは今朝からたっぷり体を動かしてきましたから、これくらいは食べても平気ですわよ」

体を動かしたからって、そんなに食べたらどんどん太っていくに決まっている。モオルダアは注意しようと思ったが、そんなことを言ったら今のスケアリーはブチ切れるはずである。彼女は自分がちよつと太ってきたことを気にしている、ということを知られたくないみたいだから。

モオルダアはスケアリーがトレーの上に並んだ数々の料理をたいらげていくのを眺めながら彼女に聞いた。

「それで、警察の方では何か解ったの？」

スケアリーが食べながらとぎれとぎれに答える。

「特にこれといったものはありませんでしたけれど。何しろ相手は猛獣ですから。…被害者のタダノは何かの動物に襲われて死亡した可能性が強いんですよ。ですから彼の持ち物などを調べても特に事件に関係があると思われるものは出てきませんでしたわ。…でもあなたにはそんなことは通用しないでしょうから、あたくしが気を利かせて彼の持ち物リストを用意してきましたのよ。持ち物といってもタダノは手ぶらで歩いていたんですから、あつたのは財布と携帯電話くらいですけど。…それでも財布の中にもらったばかりだと思われる名刺がありましたわ」

「名刺かあ。それが何かこの事件と関係があるのかなあ？ 今回も前回のコウモンの狼と同じように人間に寄生している猛獣が起したものだとしたら、関係がないとは言えないけどね。コウモンの狼は宿主の知人ばかりを襲っていたんだから。でもボクはもう他人のコウモンから猛獣を引っ張り出すなんてことはしたくないんだよねえ。今回は別の路線で捜査を進めたらどうだろう？」

「ちよいと、人がものを食べている時にコウモンの話なんかしないでくださるかしら」

スケアリーはモオルダアを睨みつけてからまた食べ始めた。モオルダアは仕方なく黙っていたら、先にスケアリーが話し始めた。

「ところで、別の路線って、どんなのですの？」

「たとえば狼男みたいな……。もしかして昨日の夜は満月じゃなかった？」

「昨日は月が出ていませんでしたわよ。それに今回は狼は出てきませんのよ」

スケアリーはそう言っつて、ポケットから小さなビニール袋を取り出してモオルダアに渡した。モオルダアがそれを見ると中には毛が一本入っていた。

「何これ？」

「それは、動物の毛ですよ。それも狼ではなくてネコ科の動物のものですわ。多分トラかなんかじゃないかしら。遺体に付着していましたのよ。でもこの辺りの動物園でトラが逃げたという話は聞きませんし……」

「ネコ科の動物かあ。これはネコ娘の仕業かも知れないな」

スケアリーはこれを聞くと、料理を口へ運ぶ手を止めてモオルダアの方を見た。また変なことを言い出しましたわ。

5

スケアリーは大学の空き教室を使っつて聞き込み捜査をしていた。被害者のタダノに関する情報を集めるために彼のクラスメートや同じサークルの生徒などを招集したらしい。学生の方も捜査に協力すると言えば欠席にならずに講義をさぼれるので喜んでやつて来る。聞き込み捜査はまるで個人面談のように行われた。教室の中にスケアリーがいて、外から一人ずつ学生が入っつてきてスケアリーにいろいろ聞かれるのである。

ところでモオルダアはどこへ行つたのだろうか？ 彼は学食を出ると「ちよつと必要なものがある」とか言っつてどこかへ行つてしまった。スケアリーとしてはモオルダアが居ないほうが捜査がはかどるからいいのだが、学生の数があまりに多い上に特にこれといったことも聞き出せないで次第にいらつてきた。彼女はほとんどの学生から話を聞き終わつて残すところ一人と言つるところまで来た。次にやつて来るのはタダノが持つていた名刺の人物である。

「どうぞ、次の方入っつていらして」

スケアリーが教室のドアに向かって声をかけたが、誰も入ってくる様子がない。スケアリーはさらにイライラしてきた。「まったく、最近の若い方達は時間にルーズでいけませんわ」スケアリーが眉間にしわを寄せて怒っていると、ドアの開く音がした。

入ってきたのはモオルダアだった。彼はスケアリーの怖い顔を見て、また自分が悪いタイミングでここにやってきたんだということを悟った。

「ちよいとモオルダア。今まで何をやっていたんですの？ もう聞き込みはほとんど終わりですよ」

「まあ、いいじゃないか」モオルダアは多少びびり気味に答えた。「そうは言ってもたいしたことは聞き出せなかったんだろ。ボクはそれよりも重要なものを手に入れるためにスーパーまで買い物に行ってたんだから」

「スーパーなんかは何を買いに行つていらしたの？ まあ、聞いてもあたくしの気分が悪くなるだけですから、聞かない方がいいですわね」

スケアリーは机の上にある聞き込みの資料を見つめていた。

「なんだかあたくし、タダノのことが可愛そうになってきましたわ」

「あれ、なんだかキミらしくないねえ。被害者に同情するなんて」

「そうじゃないんですのよ。学生達の言つてることをまとめると、こんな感じになるんですの」

スケアリーはモオルダアに資料を見せた。それにはだいた次のように書かれている。

クラスメートの話によると、ほとんどの学生が彼とあまり関わりたくないと思つていた。原因は彼が周りの空気を読めないから、ということだった。それから、サークルのメンバーも同様だった。合コンの人数あわせで仕方なく彼を呼び出すことはあつても、それ以外では彼と飲みに行くようなことはなかったようだ。何よりも彼はサークルの女子メンバーから嫌われていたのだ。そんなやつとは仲良くしたくない、というサークルの男子メンバーの意見にもうなずける。どうして、女子メンバーが彼のことを嫌いかという点、喋つてばかりいるくせにその話が少しも面白くないから、ということだ。

モオルダアは資料から目を上げると納得したといった感じでスケアリーを見た。

「タダノはある意味ではボク以上に寂しい学生だったんだねえ」

「そうでしょう。悲しくなるでしょう。あたくし、途中で聞き込みをやめようかとも思つたんですよ。それより、今あなた『ボク以上に』とか言いませんでした？ あなたの学生時代がどうだったのか、まあだいたい想像はつきま

ど、あなたもこんな可愛そうな学生でしたの？」

「そんなことはないよ。第一ボクがテニスサークルなんかには入るわけないだろ。ボクがどんな学生だったか、それはまたいつか解ると思うよ。それよりも捜査の続きはどうなったんだ。まったく、この話は始めだけ緊張感があって、それから後は関係のないことばかりだ。作者は最近集中力がなくなってきたってんじゃないのか？」

6

ネコ科の女

モオルダアとスケアリーはここにやってくるようになって最後の一人の学生を待っていたが、なかなか現れる様子はない。

「ねえ、その学生って誰なの？」

モオルダアはだらつとした感じで椅子に座ったままスケアリーに聞いた。

「例の名刺の人ですよ。調べてみたらこの大学の学生だと言うことが解りましたのよ。演劇部に所属しているみたいで、文化祭の公演で主役をやるから最近はとつても忙しいとか言っていましたわ」

スケアリーがタダノの財布から抜き出した名刺をモオルダアに見せた。「千所麗子」と書かれている。

「これ、なんて読むんだ？ センジヨかな」

「センジヨじゃなくてチジヨと読むんですよ。チジヨレイコという名前ですわ」

なんだかアダルトビデオのタイトルみたいだ。モオルダアは思っていた。同じことを思ってしまったかたは、多分モオルダア同様に変態と呼ばれてしまうかも知れない。そんなことはどうでもいい。

二人はしばらく黙ったままチジヨレイコを待っていたが、なかなかやってこない。モオルダアはさらにだらつとした感じになってきた。すると教室の扉が開いて一人の美女が入って来た。モオルダアは慌てて姿勢を正した。

「あなたはチジヨレイコさんですわね？」

スケアリーが聞くとレイコは二人を上から見下ろすような感じでうなずいた。

モオルダアはかなり盛り上がりつつある。それはレイコが美人だったというだけではない。スタイルも良い上にボディコンスーツを着ているのだ。しかもヒョウ柄だ！ いつもならモオルダアはにやけながらこの予想外に登場した美女を眺めるところだが、彼はレイコのどことなく恐ろしい感じのする表情に気付いて、平常心を取り戻すことが出来た。しかし、どうしてもミニスカートに目がいつってしまうのが悲しいところ。レイコはモオルダアを軽く睨みつけながら椅子に座った。

「あなた、タダノとはどんな関係でしたの？」
スケアリーが聞いた。

「タダノ？ 誰それ？ 知らない、そんな人」
レイコは二人とは目を合わせずに話している。

「そんなことはありませんわ。タダノの持ち物からあなたの名刺が見つかったんですから」

「ああ、あの男。それなら昨日名刺を渡したわ。友達に飲みに来ないかって言われて言ってみたら、あいつがいてしつこく付きまといってくるから、名刺だけ渡しといたの。どうしようもなくつまらない男だったけど、お金はいっぱい持っているみたいだし」

「あなた、哀れなタダノが昨晚亡くなったことをご存じなの？」

「あら、そうなの？ 驚いちやうわ」

全然驚いた感じではない。モオルダアはレイコのミニスカートからのびている太股を眺めながら二人の会話を聞いているが、何かを思いついたようだ。

「キミ。そのヒョウ柄のスーツだけど。それはまさか本物のヒョウの皮を使っているわけではないよね？」

「はっ？、何言ってるのおじさん。バカじゃない。本物のわけないじゃない」

「まあ、確かにそうだよねえ。本物のわけはないね」

モオルダアはバカな質問をしてバカといわれてしまったので、なんとなく決まりが悪かった。彼の「少女的第六感」は上手く働かないようだ。スケアリーはこのレイコという女が気に入らなかつたので、モオルダアに味方することにした。

「そのスーツがヒョウの皮で出来ていなくてもあなたの持っているその毛の生えたフサフサのバッグはどうなんですか？ それもヒョウ柄ですわね」

なるほど確かにレイコはヒョウ柄のバッグを持っている。スーツの柄と一緒になかなか気付かない。せつかくの

ヒョウ柄も目立たなくてはしょうがない。でもそれはどうでもいいことだ。スケアリーは後を続けた。

「それが本物のヒョウの皮を使ったものだったら、あなたはこの事件の容疑者になるかも知れませんか。何しろ被害者タダノの体には動物の毛がついていたんですから。あなたが昨日の夜、十時から一時の間にどこにいたか説明してもらえるかしら？」

スケアリーの言うことを聞いてレイコはフンと鼻で笑った。それからスケアリーの座っている前の机にバッグを放り投げた。

「そんなに言うならそのバッグを自分で調べてみればいいんだわ。どうせあなた達のような無能な捜査官にはそれが本物かどうかすら解らないでしょうけどね」

レイコは妙に挑戦的な態度で話し始めた。

「私が昨日の夜どこにいたかですって？」

彼女は何かに取り憑かれたように話している。顔つきもさつきまでとは少し違って、座った椅子から身を乗り出して話している。元々つり上がっていた彼女の目はさらにきつくなった感じだ。

「あなた達、私を誰だと思っているの？」

「最近では非常に珍しいイケイケ・ボディコンギャルだ」

モオルダアがまたバカなことを言ったがレイコは無視した。

「私はネコ科の女よ。狙った獲物は必ず仕留めるネコ科の女。そんな私が昨日の夜あのバカなタダノと一緒にいたなんて言うの？」

「それは、あなたが昨晚の行動をちゃんと証明してくださいと何とも言えませんわ」

スケアリーは妙にテンションがあがっているレイコに驚いてはいたが、まだ冷静さは保っているようだ。

スケアリーのこの言葉にレイコは少し落ち着いたようで、乗り出していた体を少し後ろに引いた。

「あなた達は何も解っていないよね。私が昨日の夜何をしていたか、おバカな捜査官達に教えてあげますね」

これを聞いてスケアリーは信じられないといった感じでモオルダアの方を見たが、モオルダアはボディコンスーツに夢中なのでスケアリーのことはまったく気付かない。レイコは話を続けた。

「私が夜の十一時に真っ直ぐ家に帰ると思っっているの？ 私がそんなつまらないことをするわけないでしょ。あいつまらない居酒屋を出た後、私はカレと会っていたわ。あれは確か十二時くらいでしたわね。別のカレから電話があったか

らそつちの方にも行つたわ。そのカレと別れたあとは、お小遣いをたくさんくれるパパのところ遊びに行つて、その後はおもうひとりのパパと遊んで、その後は友達とクラブに行つて踊つてたわ。おバカな二人のために言つておきますけど、パパつて言つても実の父親じゃありませんから」

レイコの言うことを聞いていて、モオルダアはなんだかボディコンスーツに盛り上がっている気にもなれなくなつてきた。

「ねえ、キミの言っている彼達とパパ達はキミがそんなふうだということは知っているのかなあ。古典的ロマンス作品だつたらそのうち死人が出るぞ」

レイコはまたフツと鼻で笑つた。鼻で笑われてしまったのでモオルダアはもう何も言えない。スケアリーの方はそれでは納得がいかない。この生意気な女を何とか弱られてやりたいと思つているようだ。

「あなたのカレ達はあなたのアリバイを証明してくれるかも知れませんが、あなたのパパ達はきつとあなたのアリバイは証明してくれないでしょうねえ。どうせ、そのパパ達は奥様も子供もいるんでございませう？」

「あの人たちは私の言いなりよ。そんなことがあるはずないわ」

レイコは少しも動じることがなかつた。それを見ていたモオルダアはなにやら妙な行動を起こし始めた。彼はポケットの中で何かを探しているようなそぶりを見せた。スーツのポケットの中をそんなに探し回つても、それほどものが入っているとは思えないのだが、彼は何かを探しているようなそぶりをレイコに気付いて欲しいような感じだった。モオルダアがしばらくポケットの中をいじつているとやがてレイコはその行動に気付いてモオルダアのポケットの方に目をやった。

モオルダアはスーツのポケットからカツオ節をとりだした。カツオ節といつても削つてあるやつではなくて、棒状になつた削る前のものだ。彼はそのカツオ節をレイコに見えるようにゆつくりとポケットから取り出した。

その瞬間、レイコの表情は一変した。目を大きく見開いて身を乗り出すと、手を上げて顔の前まで持つてきた。その手は何かをわしづかみにする時のように広げられていた。それからレイコはネコが威嚇する時のように歯をむき出しにして「シャーッ」という音を出した。モオルダアはこれを見てにんまりしている。その後、モオルダアがカツオ節をポケットの中に入れてしまうとレイコはまた元の状態に戻つた。

スケアリーはモオルダアが何をしたいのか良く解らないながらも、レイコの反応には少なからず驚いていたようだった。この女は本当にネコなんでございませうか？ でも、そんなことよりスケアリーは何とかしてレイコを弱らせた

い。

「いいですか。あなたがそのお小遣いを沢山くれるパパ達と何をしていたかによっては、あなたは……」
スケアリーが喋っている間にモオルダアは何度もポケットからカツオ節を出したりしまったりしていた。そのたびにレイコは爪をとがらせて「シャーッ」という声をあげていた。これではスケアリーは何も聞けない。

「ちよいと、モオルダア。あなたいつたい何がしたいんですの？ あんまりバカなことばかりしているとあなたひどい目に遭いますわよ」

モオルダアはニヤニヤしながらカツオ節を出し入れしていたが、ひどい目に遭わされると聞いて少し真面目な顔になった。それからレイコの方に向かっていった。

「キミが潔白なのは解つたよ。それにしてもキミはいつたい何者なんだ？」
このモオルダアの質問にレイコはまた目をつり上げた。

「おバカな捜査官達。さつきから何度言えば解るの？ 私はネコ科の女よ！」
こう言うと、レイコは立ち上がりモオルダアが座っている前の机に軽々と登った。その様子はネコそのものだ。それから、そこにしゃがむとまたさつきのように手を顔の横に持ってきて爪を見せた。

「私がネコならあなた達は何？ シャーッ！ あなた達は、犬よ。ご主人様の顔色を見て尻尾を振っている犬にすぎないわ。そんなあなた達に私の何が解るといふの？ いいえ、何も解るはずはないわ。あなた達のような犬に私が捕まえられるはずないんですから。シャーッ！！」

レイコは机の上にしゃがんでいるためにモオルダアの目線の先にはミニスカートの中がよく見えた。モオルダアには彼女のトラ柄のパンティーが丸見えだったのだ。

「これは前門の虎だ！」
モオルダアは思わずつぶやいた。

レイコはモオルダアの発見には気付かずに、机の上から降りてドアの方に向かっていった。

前門の虎パンティーのおかげで半ば放心状態のモオルダアをよそにスケアリーは立ち上がってレイコを呼び止めた。
「何か事件に関して気になることがありますしたら連絡してくださいさるかしら」

そういつてスケアリーはレイコに名刺を手渡した。

「そう、それならそうしてあげるわ。でも私がある方のような薄汚い犬と連絡を取るようなことはないと思うわ」

そういつて、すたすたとドアの方へ歩いていった。二人とも出ていくレイコの方を見ていた。するとレイコはドアの手前で振り返った。

「その変態のおじさんと、ポツチャリのおばさん。私を容疑者にしたらただじゃおきませんから、そのつもりでいてくださいよ」

モオルダアとスケアリーは教室から出ていくレイコを唾然として見つめていたが、しばらくしてスケアリーがモオルダアに聞いた。

「あの女、あたくしのことをポツチャリのおばさんと言いませんか？」

モオルダアは一瞬ドキッとしてから困った顔をしている。

「さあ、ボクにはよく聞こえなかつたけど……」

「犯人はあの女に違いありませんわ。あんなのが世の中にのさばってはいけませんわ。あれはきつと恐怖のヒョウ女に違いありません。そうですわ、昨日はちょうど新月でしたわね。犬とネコは正反対ですから、狼男は満月に変身してヒョウ女は新月に変身するんですよ。早くあの女の正体を暴いて捕まえないといけませんわ」

スケアリーはどうしてもレイコが気に入らないので、何とかしてレイコを犯人にしたいようだった。しかし、モオルダアは涼しげな表情をしている。

「あれは犯人じゃないと思うよ。彼女は天才的な女優だよ。キミはボクがこれをポケットから出した時の彼女の反応を見ただろ？」

そういつてモオルダアはポケットからカツオ節を取り出した。

「これがボクの考えとは反対の意味で役に立ったね」

「どういうことですか？ 彼女はそのカツオ節に異常な反応を見せていましたわよ。それはさつきあなたがスーパーで買ってきたものでしょう？ あれを見たら誰だつて彼女がヒョウ女、或いはネコ娘だということは解りますわ」

スケアリーはレイコを犯人にしたいあまりモルダアみたいな見解で物事をとらえている。なぜか今はモオルダアの方が冷静だ。モオルダアがポケットからカツオ節を顔の前に持ってきてから言った。

「彼女が本当にネコ娘ならボクがポケットからカツオ節を出す前にこれに気付いてボクに飛びかかってきたはずさ。ネコは人間よりもずつと鼻が利くからねえ。それに、タダノを襲ったのは大型の肉食動物だろ。トラとかヒョウとかがカツオ節に反応するかなあ？ ボクの考えでは彼女は『ネコ科の女』になりきっているだけだと思っただけね。まさに身も

心もね」

モオルダアは得意げにスケアリーを見ていた。スケアリーは理解はしていたが納得はしていない。自分のことをポツチャリと言ったあの女をどうしても犯人にしたかった。

「そうですよ。あなたがそういうのなら、あなたの好きなようになさればいいわ。あたくしはあのムカツク女のことを洗いざらい調べて何とかして刑務所送りにしてやりますわ」

「それよりも、ボクにいい考えがあるんだけどねえ」

モオルダアはいやらしい笑いを浮かべた。

「問題解決の鍵はきつと演劇部にあると思うよ」

「じゃあ、そうしなさいな。あたくしはあの女のことを徹底的に調べてやりますから。どんな些細なことでも見つけたら、必ず刑務所送りですわ。それじゃあ、失礼いたしますわ」

スケアリーはモオルダアをおいてどこかへ行つてしまった。「スケアリーが元の体型に戻るまで、うかつに刺激したら危険だな」モオルダアがスケアリーの出ていった後を眺めながら思っていた。

7

ウイスキー臭い部屋

薄暗い部屋に二人の男が向き合つて座っている。薄暗いこの部屋は怪しい雰囲気。二人とも深刻な顔で何かを話し合っている。一人の男はなぜか先程からウイスキーの瓶をラップ飲みしている。それなのに少しも酔っぱらっている様子はない。

「あの捜査官を野放しにしておくのはそろそろ危険じゃありませんか？」

男がウイスキー男に向かって言った。

「二人は何かに気付いているとでもいうのかね？」

「今のところは何も。しかしモオルダアという男は一筋縄ではいきませんよ。あれはどうしようもない間抜けです。その間抜けさが我々にとってはかえつて危険なんです。いつそのこと彼らを……」

「彼らを消したところでどうせ後に続くものが現れるだけだ。それに主人公がいなくなったら誰が代わりをやるんだ？ キミがやるかね？」

「いやあ、それはちよつと困ります」

「毒だつて使い方によつては薬になることだつてあるんだよ。我々が彼らを利用すればいいんだ。彼らには真実のかけらを見せてやれば良いんだよ。そうすれば彼らによつて嘘の情報が広められることになる。その間に我々は、計画を遂行すればいいのだ。彼らのことは私にまかせておけば大丈夫だよ」

「それでも、万が一彼らに全てを知られてしまった場合は……」

「その時はその時だ。今は彼らの監視をだけをしていればいい」
「ウイスキー男はそういつてまた瓶を口のところに持つていった。」

「ネコ女優はどうしますか？」

もう一人の男がウイスキー男に聞いた。

「彼女は十分に働いたよ。彼女にはもう何もしてもらうことはない。そのままにしておけばいい」

もう一人の男はこれで話が終つたと解つたのか、何もいわずに部屋を出ていった。その後ろ姿を見送りながらウイスキー男がまた一口飲んだ。

8

演劇部の部室

モオルダアは演劇部の部室へ入った。

「この悪魔のような男め！ 貴様を地獄に送り返してやる！」

いきなり怒鳴られたと思つたモオルダアは驚いて声のしたほうを見た。そこでは劇のリハーサル中だつた。自分が怒鳴られたのではないと解り一安心。それにしてもモオルダアは誰にでもビビつてしまうようだ。

モオルダアは興味深そうにしてリハーサルの様子を眺めていた。演技をしていた男が喋り始めた。

「その男。早くここから出ていくんだ！ さもないとキミの命がどうなつても知らないぞ」

男はモオルダアの方を見て言った。モオルダアはこれを台詞だと思っていたので反応しない。するともう一人の男が言う。

「この劇は今回が初演のオリジナル作品だ！ 貴様が誰であろうと、公演前に内容を知られてはいけないのだ！ いたい貴様は何者なんだ？ さては悪魔の使いだな。ならばこのオレが貴様を地獄に送り返してやる！」

なんだか変な台詞だなあ。とモオルダアが思っていると、リハーサルをしていた二人がモオルダアの方に近づいてくる。モオルダアは少したじろいでいたが、これも演技だろうと思つてそのまま立っていた。すると二人はモオルダアの両脇を抱えて扉の方へモオルダアを引きずっていく。

「神の力が汝を滅ぼす！ 神の力が汝を滅ぼす！ ……」

なんだそれ？ エクソシスト!?モオルダアが考えている間に二人は彼を部屋の外に追い出して、部屋の扉をボタンと閉めた。二人は台詞を言っていたのではなくて、モオルダアに部屋から出るように言つていたようだ。それにしても変な人たちだ。モオルダアはもう一度ドアのところに行つて立ち止まると、今度は追い出されないように説明してから中に入ろうと思つた。モオルダアがドアをノックしてから甲高い声を張り上げた。

「たのもう！ 我こそはエフ・ビー・エルのモオルダア特別捜査官なり。とある殺人事件の捜査のため部長殿と話がつく、只今参上！」

モオルダアも彼らのような変な口調でしゃべり出した。しかも「只今参上」つて意味が解らない。

彼が待つているとドアが開いた。中からさっきの二人とは別の男が顔を出している。

「どうも、ボクが部長です。どうぞ中に入ってください」

モオルダアがせっかくな彼らに合せて変な喋り方をしたのに、この部長は普通に喋っている。

モオルダアが中に入るとリハーサルは一時中断しているようだった。

「先程は失礼しました。公演を間近に控えてみんなナーバスになっていますから」

「いや、そのことならいいんだよ。ボクにも気持ち解る。ボクも若い頃は主役として何度も舞台に立ったもんだよ」その若い頃というのは彼が小学校の時の学芸会での話であるのだが。

「それよりも、ボクはチジョレイコという部員の話であるのだが。次の劇では主役をやるとか言うことだけど、もしかして彼女の役というのは悪女の役じゃないかな？ 彼女は自分をネコ科の女と言つていたけど……」

モオルダアがこう聞くと部長は少し笑い出しそうな声で言った。

「ああ、彼女ですか。凄いでしょ。彼女の役は、まあ悪女というか言ってみればカルメンみたいな感じなんですね。男はみんな彼女の虜というか、そんな感じですよ。劇の内容はボクらのオリジナルですから、言えませんがね。でも彼女は凄いです。ボクら彼女がいないところでは彼女のことをイタコと呼んでいるんです」

「イタコ？ それって霊媒師みたいなやつのこと？」

「そうですね。彼女の役作りは普通じゃない。あれは何かが取り憑いてるとしか思えないぐらい凄いですから。すっかり人格が変わってしまうんです。それだけじゃない、顔かたちまでその人物が変わってしまうんです。年をとった役の時には本当に老けた顔つきになってましたし、軍人の役をやった時は急に引き締まった体型になってビックリしましたよ。どうやったのか知りませんが、いつの間にか筋肉がついて大きな力こぶをボクらに見せて笑ってましたよ。まったく神がかりです。彼女ほどの天才は今まで見たことがありません」

「それじゃあ、ネコ娘に化けることも出来るんだね」

「ネコ娘？ 何ですかそれ」

「昨日の夜学生を襲った恐怖のネコ娘だよ」

「何で彼女がネコ娘なんか化けるんですか？ 確かに彼女はネコ科の女とか言ってますけど劇の中では彼女が変身することなんかありませんし、人殺しなんかもしませんよ」

「そうなのか、それは残念」

「そうは言ってもモオルダアはニヤニヤ笑っている。」

「どっちにしろ、その劇の公演は取り止めにしてもらう必要があるねえ」

「どうしてですか？ その事件とこの劇は何の関係もありませんよ」

部長が興奮してモオルダアに言った。

「いや、そうじゃなくて、このままレイコさんを悪女にしておいたら彼女が危険なんだよ。或いはボクがとぼちちりを受けるかも知れない。今ね、ネコ娘なんかよりもっと恐ろしいスケアリーという女性が何とかしてレイコさんを逮捕しようとしているんだよ。キミ達だって天才のレイコさんが逮捕されたら困るだろう？」

「まあ、そうですね。でも公演は二日後なんです。いったいどうすればいいんですか」

モオルダアはそれを聞いて嬉しそうに部長に紙を渡した。

「なに、公演はやめなくてもこれを上演すればいいんだよ」

部長は渡された紙に書かれていることを読んでいた。

「何ですかこれは。美人大学生と優秀な捜査官の恋の物語？」

「ボクが考えた話だよ。なかなかの出来だと思うけどね。もちろん主人公の美人大学生はレイコさんにするんだ。大学に事件の捜査に来た優秀な捜査官と恋に落ちるってことになるんだけど。これならうけること間違いなしだよ」

部長は困っている。

「こんな話は出来ませんよ。くだらなすぎる。ボクらの演劇部はこれでも一応アマチュア演劇界では名門として通っているんですよ。こんなのを上演することは出来ません。それに今やってる劇の脚本はなかなかの出来で、部員達も気に入ってるんですから」

「その脚本って誰が書いたんだ？」

「・・・いや、それが解らないんです。ある日、この部屋に来てみたら机の上に脚本が置いてあって、それがあまりにも素晴らしいので上演することにしたんです。部員の中の誰かだとは思いますが・・・」

それは、何とも怪しい話だが、モオルダアは気付かない。というより、そんなことには興味がないのだ。かれは自分の考えたストーリーを彼らに演じてもらう必要があった。悪魔の使い、モオルダアのくだらない計画のために。

「そんなものを上演して、後で問題が起きたらどうするんだ？ そんな危険な脚本よりもボクの脚本を使うべきだよ。もし出来ないなら・・・」

部長は不安そうにモオルダアの顔を伺っている。

「もし出来ないなら？」

「キミの代でこの演劇部は解散と言うことになるかな？ キミは我々が誰だか解っているのか？ エフ・ビー・エルを敵に回すときつと痛い目にあうと思うけどね」

部長はエフ・ビー・エルという謎の団体のことを知らなかったが、きつと凄いことが出来るのだと思っていた。本当に演劇部が解散に追い込まれてしまったら・・・。彼は部長として苦渋の決断を迫られていた。それにしても、モオルダアは職権を乱用しているのだが、こういうことは許されていいのでしょうか？ まあ、いいか。

「解りましたよ」

部長がつぶやくように言った。

「そうか、それは良かった。それじゃあ今すぐレイコさんに連絡してくれ」

モオルダアの目が輝いている。部長が携帯電話を取り出してレイコに連絡を取ろうとしていた。

「その代わり、あなたの話はひどすぎますから、かなり手直しをしないといけませんよ。子供でもこんなひどい話は書けないですよ。まったく」

部長はそういうと電話に出たレイコと話を始めた。モオルダアは嬉しそうに部長の肩を叩いた。

「まあ、脚本の手直しはキミ達にまかせたよ。それじゃあ、ボクは捜査があるからこの辺で」

モオルダアがご機嫌で部室を後にした。

さあ、これから美人大学生レイコと優秀な捜査官の恋の物語が始まるぞ。モオルダアはこう思つて夕暮れのキャンパスをうろついていた。

9

三十分ほど大学内をうろついていたモオルダアだったが、そろそろ飽きてきていた。何しろ特に用事もないのに、ただうろろろしていただけなのだから。もうそろそろ帰ろうかとも思つたが、ここで帰ってしまったらモオルダアの計画は台無しである。するとそこへスケアリーから電話がかかってきた。

「ちよいとモオルダア。いつたいどこにいるんですの。あなたがふらふら遊んでいる間に事件は意外な方へ展開いたしましたわよ」

「へえ、そうなんだ。犯人が捕まったのかなあ」

「そうじゃありませんのよ。犯人はトラでしたのよ。しかも本物のトラで、あなたが喜びそうなトラ人間とかじゃありませんのよ。ガツカリでしょ」

「まあ、ガツカリと言えばガツカリかな」

そうは言つても、それほど落胆した様子はない。今、彼の考えは別のところにある。

「なんだか、どうでもいいような感じですね。まあ、いいですわ。詳しいことを話して差し上げますから、よく聞くんですよ」

「ああ、いいよ」

よく聞くつもりなどあまりない。

「実はあの事件があった付近で違法にトラを飼っている男がいて、その男がうつかりトラを逃がしてしまったんです。でもちゃんと許可を取らずにトラを飼っていたものですから、警察に通報するわけにもいかず自分でトラを探し回っていたんです。それからあんな事件が起きてしまって、始めは男も黙っていたんですけど、やっぱり罪悪感があつて泣く泣く警察に連絡したそうよ。警察はあたくし達が大学でどうでもいい聞き込みをしている間にトラを見つけて射殺したそうですわ。ちよいと、あなた。聞いていらつしやるの?」

「ああ、一応。そういえばキミはレイコさんのこと調べてたんじゃないのか?」

「それなら面倒だからやめましたわ。どうせもうあの忌々しい大学に行くことはなさそうですし」

「へえ、そうか。それじゃあボクはその忌々しい大学でも少し散歩でもしようかな。もうこの辺も安全みたいだし」
「あなた、まだ大学にいらしたの? もしかして、あなたはまたトラのパンツを拝めるんじゃないかと思っっているんじゃないでしょうねえ? まったくあなたは最低ですわ。あなたみたいな変態はいつまでもトラのパンツを追い回していればいいんですわ」

だんだんスケアリーの機嫌が悪くなってきた。

「いやいや。もうトラのパンツにはお目にかかれなと思うよ。次にボクが見るのはシルクの勝負パンツかな。それにレイコさんは今頃きつとキミの嫌いなレイコさんじゃなくなってるはずだよ」

「どうでもいいですけど。あなたがそこで変態事件を起こして警察に捕まるようなことがあつてもあたくし助けには行きませんからね」

ここでブチッという音がして電話が切れた。スケアリーは機嫌を損ねたがモオルダアは少しも気にしていない。

そろそろ出てくるころだけどなあ。モオルダアは先程訪れた演劇部の部室の辺りを歩いていて。もう陽はほとんど落ちかけて、周りは夜と変わらぬ暗さになっている。

「あの、モオルダアさん」

モオルダアは後ろから呼び止められた。モオルダアはそれがレイコだということとは解っていた。しかし、モオルダアの予想どおり声の質は昼間取り調べをした時より柔らかい感じになっていた。モオルダアはどうとう来た! と思つて振り返つた。そこには確かにレイコがいた。しかし、その姿はモオルダアの予想以上だった。これがヒョウ柄のボディコンスーツを着ていた女性と同じ人間なのだろうか? レイコは透き通るような瞳でモオルダアを見つめている。そこに

は知性と優しさが感じられるようだった。それから白いカーディガンを着て、授業で使うノートなどが入った鞆を体の前で抱えている姿は清楚という言葉をそのまま形にしたような印象さえ与えている。レイコは自分の演じる役が変わったと部長から告げられて間もなく、まるつきりモオルダア好みの美女に変身してしまった。

振り返ったモオルダアはニヤニヤと笑いそうになるのを必死にこらえて、変にゆがんだ口元を引きつらせた。

「キミは、チジョレイコさんだったね？」

モオルダアは知っているのにわざと聞いてみた。モオルダアの美女に対する態度はいつもと変わらない。始めは何とも思っていないよ、という感じで白々しい態度をとるのだ。そして、その後でどうなるのか。まあたいていの場合、というよりも今まで一度も彼のその作戦が成功したことはない。何よりもまず開けつばなしの口から今にもよだれが垂れつきそうところが、少しも白々しい態度にはなっていないのだ。

「えっ？ 私はチジョじゃなくてセンジョですけど」

「そうなの？」

でもどうしてだろう？ さつきは「チジョ」だったのに。それにさつきモオルダアが名刺の名前を「センジョ」と読んだらスケアリーはわざわざ訂正した。もしかするとレイコは演じるキャラクターによって苗字が変わるのかも知れない。本名はどっちなんだ？

チジョでなくなったレイコがモオルダアに一步近づいてきた。

「モオルダアさんはこれから捜査に行かれるんですか？」

「そうだねえ。今回の捜査は多少危険なものになるかも知れないね」

さつきスケアリーに事件が解決したと言われたにもかかわらず、適当なことを言っている。

「あの、モオルダアさん。私怖いんです。だってあんなひどい事件の後でしょう。もしかしてまた誰かが殺されたら……」
そう言っているレイコの目は少し潤んできた。

「それに、私の家は昨日の事件現場のすぐ近くなんです。それで、モオルダアさんをお願いがあるんです。私を家まで送ってくれませんか？」

モオルダアの目はレイコの不安そうな眼差しに相反して輝いてきた。

「もちろんだとも。市民の安全を守るのが優秀な捜査官の第一のつとめだからね」

モオルダアはもうこの周辺が安全だと言うことを知っているの、何とでも言える。これを聞いてレイコの瞳から不安

が消えた。

モオルダアは大学の外へ通じる方向へ歩き出すと、後ろからレイコが近づいてきて彼の腕にしがみついていた。「やったー！」モオルダアは頭の中で叫んでいる。彼が考えていた以上に彼の計画は上手くいっている。脳内の花畑は満開の花でいっぱいになった。綺麗な蝶々もひらひら飛んでいる。それから遠くに目をやれば空には虹も架かっている。「美人女子大生と優秀な捜査官の恋の物語が今始まるのだあ」モオルダアは鼻息が荒くなっているのに気付いて慌てて冷静さを取り戻そうとしている。それでもレイコはそんなことには気付かずモオルダアのすぐ隣に立っていた。

二人が寄り添って歩き出してからすぐレイコは自分の腰に当たる何かに気付いてモオルダアに聞いた。

「あの、モオルダアさん。これなんですか」

レイコはモオルダアのポケットを指さしている。

「ああ、これか。こんなものにはもう用はないんだったな」

モオルダアはそういうとポケットからカツオ節を取り出して道端に放り投げた。

二人はぴつたりとくつついて大学の外へと歩いていった。その後、どこからやってきたのか知らないが、モオルダアが投げ捨てたカツオ節のところへ何匹ものネコが集まった。彼らが話していた場所は今、ネコで溢れかえって不気味な様相を呈している。

10

公園

スケアリーは仕事を済ませた後、近所の公園でジョギングをしていた。この広い公園では彼女の他にも何人かの人間が運動のためにやってくる。ある人は体を鍛えるため、ある人は太りすぎを気にしているため。

スケアリーはかなりのスピードで走っているので途中何人もの人を抜かしていった。その後ろから彼女に迫ってくる人影があった。その男がもう少しでスケアリーに追いつこうというところで、彼女はそれに気付いてさらにスピードをあげた。どうしても抜かされるのイヤなようだ。スケアリーと後ろの男の差が少し開くと、後ろの男もスピードをあげてまたスケアリーに近づいた。するとスケアリーもそれに気付いて、また差を広げた。二人の差が広がったり縮まった

りしているうちに、いつしか二人はもの凄い速さで走っていた。しかし、さすがのスケアリーもこれ以上速く走ることには無理なようで、立ち止まると後ろから来た男にきつい口調で言った。

「ちよいと、あなたはいったいなんだって言うんですの？ 誰であろうとあたくしを追い抜くことは許されませんのよ！」

男は膝に手をつけて息を切らしている。スケアリーは知らないが、それは謎の男ドドメキだった。ドドメキはジョギング中を装って密かにスケアリーに接触する予定だったらしいが、上手くいかなかった。彼は苦しそうにスケアリーに封筒を差し出している。

「何ですのこれは。もしかしてファンレターかしら？ それならそうとおっしゃってくれればいいのに」

スケアリーが封筒を受け取ると、ドドメキは苦しそうな呼吸の合間に声を振り絞るように話し始めた。

「事件は、事件はまだ終わっていないよ。ヤツらの、手にのつては……ダメだ」

スケアリーは何のことだか解らずに封筒を眺めていた。

「これはいったい何なんですの？」

スケアリーが封筒から目を上げて聞いたが、もうそこにはドドメキはいなかった。どんなに息を切らしていても、謎の男は煙のように消えてしまう。さすがはドドメキ。

スケアリーは辺りを見回して謎の男を捜したが、どこにも彼の姿はなかった。彼女はその封筒をその場に捨てようとも思ったが事件がどうの、とか言っていたことも気になったのでとりあえず持ち帰ることにした。

11

路地

暗い路地をモオルダアとレイコが歩いてくる。

「ねえ、モオルダアさん。この事件の犯人はどんな人だと思います？」

「そうだなあ。こういう事件の犯人は普通の人では予想もつかないところにいることが多いんだよ。ボクのような優秀な捜査官にはそれが良く解るんだ。でもこれだけは言えるねえ。犯人は血も涙もない冷酷なやつだよ。それから、犯人

は頭の切れるヤツだね。犯人とボクとの頭脳の勝負と言ったところだな」

モオルダアはいる訳のない犯人のことを勝手に想像して話している。

「犯人はまた人殺しをするのかしら？」

「そうだねえ。きつと連続殺人になるだろうね。それはボクが許さないけどね。でもキミみたいに綺麗な人は気を付けた方がいいね」

それを聞いてレイコはつかんでいたモオルダアの腕に体をすり寄せて来た。

「モオルダアさん。こんなお願い、無理なのは解つていますけど。今夜はうちに泊まってくれませんか？ 私、一人暮らしだし、他に頼れる人がいないんです」

最高だ。モオルダアは喜びのあまり言葉を失っている。モオルダアが何も言わないでいるとレイコはまだ先を続けた。

「それに、あんなひどい事件があつたつていうのに、この辺には少しも警備の警官がいないし。だから、お願いです」警察がいけないのは当たり前だ。トラが捕まつて捜査は終了なのだから。

「も、もちろんだとも」

歓喜に言葉を失っていたモオルダアが何とか答えた。それにしても、モオルダアはどうしてしまったのか？ 彼のやる事がこんなに上手くいくなんて。まあ、ここはどうなるか成り行きを見守ることにしよう。

モオルダアはまるで夢の中にいるような気分であつたが、しばらくしてふと立ち止まった。レイコが少し驚いてモオルダアの顔を見上げる。

「ねえ、レイコさん。今、何か言つた？」

「いいえ、何も」

気のせいだったのだろうか？ モオルダアは辺りを見回してからまた歩き始めようとしたが、またすぐに立ち止まった。レイコの顔が次第に不安で曇つていく。

「やつぱり、また声が出たよ。キミには聞こえなかった？ ちよいと、旦那。とか言つてたでしょ」

「いいえ。私には何も聞こえませんでした」

モオルダアの様子次第におかしくなつていくことにレイコは怖くなつてつかんでいた彼の腕から放れた。

モオルダアはいつか何を言つていようか？ この静かな路地で誰かの声がすれば二人とも気付くはずなのだ。聞こえない声を探して辺りを見回しているモオルダアを見てレイコは気味が悪くなつてきた。もしかするとこのモ

オルダアという男が殺人犯なのではないか、という気にさえなつた。モオルダアは時に精神に異常をきたして、聞こえないはずの声に従つて猟奇的な殺人を犯すのかも知れない。レイコはそんなことを考えてその場に立ちすくんでしまった。

モオルダアはゆつくりと辺りを見回して次第に道の隅の暗い場所に近づいて行つた。

「そこにいるんでしょ？ 暗くてよく見えないけど……」

レイコはモオルダアが何をやっているのかまったく解らなかつたが、恐怖のあまりただ成り行きを見守るしかなかつた。モオルダアは暗がりの方に体を向けていたが、目はうつろで焦点が合っていない。半分開いた口からはよだれが流れていた。こんな光景は誰が見ても怖い。

レイコはモオルダアが進んでいく先に目をやって、叫ぶ間もなく息をのんだ。レイコにはそこに大きな目が二つきらりと光つたように思えたのである。モオルダアはふらふらとその暗がりへと近づいていった。まるで何かが彼に乗り移つたように。

12

スケアリーの高級アパートメント

公園でのジョギングを終えたスケアリーは自分の部屋へ帰つてくるとドドメキに渡された謎の封筒を机の上に放り投げた。なんだかまるで興味を持っていないようだ。それよりも彼女は先にTシャツを不快に彼女の体にまわりつかせている汗を洗い流したかつた。

彼女はバスルームに入るとバスタブの蛇口をひねつた。それから上着を脱いで鏡の前に立つた。彼女は始め自分の顔を眺めていたがしばらくして、鏡から少しさがつてなるべくからだが多く映る位置まできた。彼女は他の何をしている時よりも真剣な表情になっている。そこで彼女は体を左右にひねつて、自分の前から見た姿と横から見た姿を確認した。それから鏡の中の自分に対して軽く挨拶をするような感じで微笑んだ。

「やつぱり、あたくしはスリムでしたわ！」

驚いたことにスケアリーは朝、ブティックの鏡に姿を映した時よりも数段にやせていた。たったの一日でこれだけや

せるほど脂肪を燃焼したというのであろうか。これは、もの凄いミステリーである。しかし、こんなことに驚いていては話がわき道にそれていってしまうので、彼女の驚異のダイエツト術について考えるのはよそう。スケアリーとはそういう人、なのである。

スケアリーはしばらく満足げに自分の体を鏡に映して眺めていた。彼女は自分の姿に見とれて、今にも雑誌のグラビアに載っているセクシーな写真のようなポーズをとったりするんじゃないかという勢いだったが、電話の音が鳴って彼女の楽しい時間は終わった。彼女は電話に出るために上着を羽織って居間の方へ向かった。

スケアリーが電話に出ると、彼女がどこかで聞いたような声が聞こえてきた。相手はかなり取り乱しているようで、彼女が電話に出た時には何を話しているのか解らなかった。

「もしもし、失礼ですけど、どなた様でいらっしゃいますの？」

「スケアリーさん。私、私です。大変です。大変なんです。モオルダアさんが！ 大変なことに！」

スケアリーにはよく意味が解らなかったが、話している相手がレイコであることに気付いた。

「ちよいと、あなた。もしかしてあなたはあたくしをバカにしてこんな電話をかけているんじゃないでしょうね？ イタズラ電話は犯罪ですよ」

スケアリーは昼間に彼女にあつた時のことを思い出してかなりきつい口調になっている。しかし、レイコはもう「ネコ科の女レイコ」ではない。「恋する大学生レイコ」になっているのである。スケアリーもなんとなく声の調子などから、これはイタズラではないことが解っていた。それにレイコはかなり怯えているようだ。

「違うんです。モオルダアさんが。助けてください。お願いです！」

何が起きたのか解らなかつたが、とにかく大変なようだ。

果たしてモオルダアの身に何が起こつたのか？ 盛り上がってきたところで、この話は次回に続く……。

to be continued...

シーズン・ワンの真実

これは作者が自身の作品を熱く語る場所ではありません。そういうのってアマチュアのかたがよくやってしまいがちですけども、それをやってしまつては、印象が悪くなりますでしょ。これまでのエピソードの「あとがき」だと思つてくだされば結構でございますのよ。でもなぜかインタビュー形式ですわ。(スケアリー)

「ペケファイル」について

正直言つてこれほどの人気が出ると思つてもいなかったよ。

—このコーナーは少しも人気がありませんか？

そうなの？ まあ、ボクの頭の中では大人気だよ。確かに、こんな長い文章誰が読むんだ？ っで感じだけど。始めた時は、自分の頭の中にある話を文章にするのにはたいした量はいらなだろうと思つていたんだ。でも実際に書いてみて驚いたね。第二話の「猿軍団」でエフ・ビー・エル初の捜査活動が始まった訳だけど、同時に私がストーリーのある長い文章を書くのも始めてだつたんだ。なるべく詳しく書いた方がいいだろうと思つて書いていたら、出だしの場面だけでかなりの量を書いていたね。文庫本で言つたら十ページ分ぐらい。あの牧場のじいさん、ばあさんの話だけで一話が終つてしまふような感じだつたよ。仕方がないので、そこまで書いた文はボツにして書き直したけどね。

ペケファイルはいかに簡潔に書くかが重要だということが解つたね。それでも短すぎれば読んでいる人は何が起こつたのか解らないし、長すぎてもよくない。長い文章はあまり好まれないからね。特にちらちらしてるパソコンの画面では。本当は多少長くても詳しくいろいろな説明をしていった方が、話に引き込まれるんだけど。ボクにそれだけの技量があるとは思えないし、分かり易さの方を優先させたんだよ。

それにくだらないうギャグはいくらでも思いつく。それを全部書いていたら、と思うとゾツとしてしまうよ。

——どうでもいいですけど、話の中に作者であるあなたと、Dr.ムスタファの名前が出てくるのですが？

そういえばそうだったね。あのおかげで少し話が解りづらいついて思っている人もいるかも知れない。でもそれは仕方ないことで、このペケファイルの出来た経緯と関係があるんだ。

このホームページのどこを見てもボクがどこに住んでいるどんな人間なのか、或いはどんな生物なのかは書かれていないんだ。それはこのホームページが出来た時から同じで、でもまあ当時はちよつとしたプロフィールの紹介もあったけど。それでLittle Mustaphaの真実というコーナーを作つてそこにエフ・ビー・エルのモルダー・ムスタファという人物を登場させたんだ。それがペケファイルの始まり。つまりモオルダアの兄、モルダー・ムスタファはLittle Mustaphaのことを捜査していたんだ。そのコーナーを読んでもいけばそのうち私、すなわちLittle Mustaphaというのがどういふ人なのか解るかも知れない、というコーナーになるはずだったんだけど面倒だから続けなかった。それが今のエピソードにも影響しているということなんだ。でも今のペケファイルに登場するLittle MustaphaとDr.ムスタファは別のところに登場する二人とは別人だと思つて欲しい。そうしないと訳が解らなくなつてくるから。ペケファイルに登場するLittle MustaphaとDr.ムスタファはモオルダアが追つている究極の謎、エイリアンと同じような未知の存在、ということにして欲しいんだ。

混乱を避けるためになるべくこの二人の名前は出さないようにしているけど、話が進んでいけばまた名前を出さざるを得なくなるからね。

——どうしていきなりシーズン・ワンが終了してしまつたんですか？

理由は単純。登場人物みんながボケ始めてつっこむ人がいなくなつたからなんだ。これはしばらく間をおいて、少し真面目にやらないといけないと思つて。

それに、モオルダアの身に何が起つたのか良く解らない状態で話が次回に続くというのもシーズン終了にふさわしいでしょ。海外の人気ドラマシリーズつていうのは大抵そういう仕組みになつてゐるんだ。そうすれば次のシーズンが始まつた時に第一話だけはみんな見るからね。それにそうすることで、放送する会社は番組を打ち切りに出来なくなる

んだ。制作側の策略ってヤツだね。それをまねしてみたんだ。でもペケファイルの場合は次のシーズンが始まるまで一年も待つことはないよ。制作するのも発表するのもボクだからね。続編は出来次第発表されるから。

もともと、シーズンを分けるなんて構想はなかったしね。ここでは全て思いつきで進んでいくんだよ。

でも完結していない話を発表してしまうところにはちよつと問題があるんだ。これまでのエピソードはだいたいのあらずじを考えて書き始めていたんだけど。必ずしもあらずじどおりに話が進むとは限らないんだ。途中で違う展開や結末を思いついて前半部分に修正を加えることは何度もあったんだけど、一度発表してしまつてからではそれが出来ない。もしかするとシーズン・ツリーの始めのエピソードは矛盾だらけになるかも知れないよ。(作総指揮・Little Mustapha)

「序章」について

正直なところを言うと、これを書いた時はまだthe X Filesのファンではなかったんだ。興味はあつたけどね。次のエピソードを書き始めるまで二年近くかかつてるけど、そのあいだに、いつの間にかファンになつていたねえ。何ていうかthe X Filesというのボクが思つていたよりはるかにポップな感じだったんだ。(Little Mustapha)

「ムツシユールとマドモアゼル」について

ボクが落ち着きがなくて、いろいろなところに興味が行つてしまうのは知つているよね。だからボクが常にthe X Filesだけのファンだと言うことはあり得ないんだ。ということつまり、ペケファイルというのもただ単にエックス・ファイルのパロディにはならないと言うこと。

モオルダアのモデルは実はフランスの優秀な警察官「クルーゾー警部」だったりもするんだ。「クルーゾー警部」を知らないって？　そういう人は「ピンクパンサー(アニメじゃない方の)」「シリーズと「暗闇にどつきり」を見るべきです。それを見て笑えなかった、という人はペケファイルを読んでも笑えないかも知れないよ。

それと、あの美女はまた登場するかも知れないね。モオルダアの最大の敵は美女なのだから。(Little Mustapha)

「猿軍団」について

あたくしが露天風呂に入るシーンはどうしてカットされているんですの？ だからペケファイルは人気がないんですよ。(スケアリー)

やっぱり舞台は日光にするべきだったかな。(嘘笑い) (Little Mustapha)

事件が解決した後の車中でのボクがいいだろ？ ボクは結構ミステリアスなんだ。(モオルダア)

私は、あのいつでも困った顔をしているハリウッドの俳優とは関係がないからね。実際に私の方が格好いいし。(ニコラス刑事)

私は酒をやめていたんだけどペケファイルのおかげでまたアル中だよ。ウイスキーはタバコと違ってはふかすわけにはいかないからね。(ウイスキー・ドリンキングマン)

「ドドメキ」について

よく考えたら、本物のエックスファイルを見たことがない人はここに登場するドドメキさんやウイスキー・ドリンキングマンの容姿を想像できないかも知れないね。二人はともに怪しい人物なんだけど、「怪しい」にも種類があるからね。

夜の闇にスーツに身を包んで現れ、仕事を済ませるといつの間にかどこかへ消えるというような怪しさもあるし、学校の体育の授業で着るようなジャージを着て寝ぐせ頭のまま歩き回る中年男性も怪しいよね。ドドメキさんもウイスキー・ドリンキングマンも前者のタイプの怪しい人なんだけどね。話の中ではあんまり解らないかも知れないね。でも読んだ人がどんな「怪しさ」を想像するかによって話の印象が少し変わっていくのも面白いかもね。(Little Mustapha)

これは次のエピソードのオープニングになる予定だったらいい。独立した話になったおかげで私の登場機会も増えた

わけだが、夢の話じゃねえ……。 (スキヤナー)

「HANAKO」について

モオルダアが最新型のモデルガンを手に入れる話。だんだん本家のエックス・ファイルから遠ざかってきているとは思いつつも、面白ければそれでいいということで書かれた話。実際にはこれより前の話もエックス・ファイルのパロディと言うには、オリジナルと話がかげ離れすぎているよねえ。 (Little Mustapha)

あたくし、本当に胸が小さいわけではありませんからね。あれは演出上仕方なかっただけのことですから。勘違いなさらないでくださいな。 (スケアリー)

ボクはいつでも危険と背中合わせって感じだろ？ それから、タニマダ先生は間違いなくボクに惚れているよ。 (モオルダア)

小学校のトイレに少女の死体があつたっておとがめなしだよ。何しろ、こんな話は誰も読んでいないんだからね。腹が立つから、もの凄く卑猥で不道德な話でも書いてやろうかな。 (Little Mustapha)

「殺人豆」について

ボクの作曲した「殺人豆の恐怖」を元にして作られた話なんだ。豆というのは「ちつぽけな」とか「とるに足りない」みたいな意味で使われがちだよ。そんな豆に襲われて殺されることがあつたらそれはきつと凄く恐ろしいことだと思うよ。 (Little Mustapha)

この話からなぜかボクの名前が変えられてしまったけど、ボクが優秀な捜査官だということには変わりはないからね。 (モオルダア、モオルダア)

芸術というのは時として人の命をも救ってしまふものなのですよ。(天才バイオリニスト・スキヤナー)

「サマータイム」について

だらだらと書いていたら凄く長くなってしまうって三話に分けることにしたよ。このエピソードでの私に対しての教訓は、登場人物を多くすればするほど話は長くなる、ということ。始めの予定どおり書いていたらきつと三話では収まりきれなかったかも知れない。実際には登場しないもう一人の人物が登場する予定だったけど、やめにしたよ。

この話ではまたエックス・ファイル以外のパロデイが登場するけど、そこでもまたパロデイしきれなかった感はないねえ。でも、まあいいか。あのボイスレコーダはスケアリーをいらつかせるのには大いに役立ったから。

ちなみにここで登場する下田のいろいろな機関(警察署とか)は実在のものとは一切関係がないからね。だれも読んでないと思うと好きなように書いてしまうけど、一応ことわっておかないとね。

前にも言ったとおり、あたくしの入浴シーンをカットするからペケファイルは人気が出ないんですよ。(スケアリー)

ボクの天才的直感(少女的第六感)を使えばきつとどんな事件でも解決しちゃうんだろうなあ。(モオルダア)

私が女子高生アイドルだからって、演技がへたくそで漢字がほとんど読めないとか思ってるでしょ? そのとおりよ!(若女将・アイ)

世の殿方のためにも私がもつと登場するべきだとは思いませんでしたか? そうすれば、この話は大人の女の色香で溢れかえって素晴らしい出来になったはずですよ。(女将・瞳)

「後門の狼」について

トイレに座っている時に思いついた話。それ以上は詳しく言えないけどね。本当は途中の詳しい話とかも考えていたんだけど、書いているときつと気分が悪くなるに違いないということで書かなかつたんだ。それに次の話のアイディアも固まってきたところだったしね。(Little Mustapha)

「前門の虎」について

本当は「猫娘」というタイトルになる予定だったけど、前回のタイトルに合わせて「前門の虎」に変更。おかげでトラパンツのネタを思いつくことが出来たよ。順番としてはトラの方が先に来るべきなんだけどね。

シーズンの最終回としてはふざけすぎなんだけど、ふざけていないと事件は解決しないんです。ペケファイルの場合は。特にモオルダアには思いつきふざけてもらわないと。

ということでもモオルダアの大ピンチみたいところでシーズン・ワンは終了。もしかするとモオルダアは何者かに殺されていてシーズン・ツーでは違う人がモオルダアの変わりに出てくるかも知れないよ。という前ふりをして、続きはシーズン・ツーが発表されるまでのお楽しみ。(Little Mustapha)

ボクはきつと生きているはずだよ。作者は間違いなくボクに惚れているからねえ。(モオルダア)

あたくしがポツチャリとか、太っていると、絶対にあり得ませんから。(スケアリー)

私を走らせるようなことは今後一切やめにして欲しいね。(ドドメキ)

一つ覚えておいてもらいたいことがある。私が出てくる時にはその話が後のエピソードで重要な意味を持っていることがあるから気を付けていた方がいいぞ。(ウイスキー・ドリンキングマン)

SFXについて

ペケファイルは文字だけで構成されているのでSFXはありません。(特殊効果担当：FX・ムスタファ)

オープニングムービーは全部静止画、つまり写真や絵から作られているんだ。なにしろここにはビデオカメラなんて高価なものはないからね。でも絵が動いてそこに音楽がつけばそれなりに見えなくもないよね。不思議なことだね。
(Little Mustapha)

Santa's End

from Black-holic Special —Peke Santa—

Little Mustapha's Black hole の 'Black-holic' (特集コーナーということになっているコーナー) に掲載された"Peke Santa"をここに掲載します。そうすることの意味があるのか? という感じですが、ここまで読んだ方はもうここでは意味など考えてもしょうがない、ということが解っているでしょうから、あえてそこは考えるのはやめましょう。

'Black-holic'では毎年クリスマススイブにブラックホール・スタジオで起こる奇妙な現象を取りあげてきました。その中でもかなりの大作となった"Peke Santa"になぜかモオルダアとスケアリーが登場しているのです。'the Peke File'とはひと味違う二人のオトボケ空間をお楽しみいただけることと思います。ちなみにタイトルは書いた時のオリジナル"Santa's End"に戻しました。

毎年恒例のクリスマス特集ですが毎年読んでいないと、この"Santa's End"の話はまったくわからないと思います。そこで簡単な説明を加えながら再編集することにしました。それでも解らないところはたくさん出てくるはずですが、これまでの"the Peke File"のエピソードを理解できた方々なら多分解ってくれるでしょう。

それでは、特別付録をお楽しみください。

Santa's End

恐怖のクリスマスが完結するのか？ 今回はけっこう長いですよ。それでも読むのか？ 読まないのか？ しかも、始めてここを読む人はこれまでの話も読まなければいけない！

今年も彼らはサンタ待ち。これまでもあれこれ手を尽くしてサンタからプレゼントをもらおうとした彼らですが、なぜか上手くいきませんでした。でも今年は何かが違う？ そして、何かが起きる？ そんな感じです。まずは、マイクロ・ムスタファ全集を読んでみる。そこに何かが隠されているような。そんな感じでもあります。¹

マイクロ・ムスタファ全集より

ピエロの季節

大屁端・比恵朗（オオヘバタ・ヒエロウ）少年は虎吉を前にして為すすべもなく立ちすくんでいた。

「なぜだ？ なぜおまえは笑わない？」

虎吉は牙をむき出しにして、涙を流しながらただその恐ろしい道化を見つめるだけの大屁端少年に詰め寄った。

大屁端少年には解っていた。誰もこの恐ろしい道化の虎吉を面白いなんて思っていないのだ。みんなは騙されている。もしかすると何か魔術のようなもので心を操られているのかも知れない。だからみんなはこの恐ろしい道化師のすることを笑って見ていられるのだ。

何も言わずに怯えている大屁端を見て虎吉は次第に表情を変えていった。表情と言うよりはその顔自体が別のものに変わっていくようだった。真っ白い顔に赤い鼻。目の周りは黒く塗ってある、どこにでもいるピエロの顔が次第に恐ろしい悪魔の顔に変わっていくように思えたのだ。

¹ Little Mustapha はサンタのおじさんからプレゼントをもらおうと毎年あれこれ手を尽くしてきましたが何故か失敗してしまう。成功の鍵を握るのはマイクロ・ムスタファだと Little Mustapha は思っていた。

恐怖のために流れてくる涙をこらえることは出来なかったが、それでも彼は何をすべきかちゃんと解っていた。大屁端少年は今こそ彼の計画を実行に移すべきだと思った。この計画が上手くいけば、世界中で彼に騙されている哀れな人たちが何かとてつもない（未完）

非暴力の季節

屁端谷・贗次（ヘバタヤ・ガンジ）はじつと独房の壁を見つめている。薄汚れた染みっぽいその壁には何も無いのだが、贗次の目には様々な人間の顔がその壁に映っているように感じられた。

その顔は彼が自由の身であった頃の記憶を彼に呼び起こさせた。「そう、確かに私は奇跡は起こさなかった。でも私のしたことは間違いではなかったのだ。今、あなた達がこうして私に語りかけてくれるように、私はいつまでも彼らに語りかけよう。そしていつの日か、彼らが理解してくれる時が来たら……」

ここで贗次は独房の外の物音に気付いて考えるのをやめた。とうとうその時が来たようだ。贗次は覚悟を決めて看守が独房の扉を開けるのを待った。このまま刑が執行されれば、きつと何かとてつもない過ちが（未完）

探偵の季節

屁端一・耕酢毛（ヘバタイチ・コウスケ）には何か考えがあるようだった。

「屁端一君。いったいどういうことなんだ？ 犯人が他にいるとでも言うのかね？」

怒百目鬼（ドドメキ）警部はハンケチで首の周りの汗を拭きながら屁端一に聞いた。

「いやあ、まだ断定は出来ませんけどね。犯人があの人三姉妹を殺害するためには、どうしてもつじつまが合わないところがあるんですよ」

「それじゃあ、犯人は誰だと言うんだね？」

「それはまだ解りませんが」

屁端一はこう言ってニコリと笑うと、いたずらっぽい目を輝かせて壁の方を指さした。怒百目鬼警部は背筋

にどす黒い寒気を感じながら彼の指さした方をみるとそこには尺役伯爵（シャクヤクハクシャク）の肖像画が掛かっていた。

「ボクが気になっているのはこれなんですよ」

屁端一がその肖像画を見ながら話を続けた。

「この肖像画は尺役伯爵が尺役製菓の会長になった時に作らせたものですよね。その時にはあの美人三姉妹はまだこの世に存在していなかった。つまり生まれていなかったのです。それなのにどうして三姉妹はこの肖像画の背景に描かれた場所を知っていたのでしょうか？ もちろん知るわけありません。これは画家の想像で勝手に書かれた背景なのですから。つまりボクが言いたいのは、露天風呂に美人三姉妹が一緒に入れば、それはとてもグロテスクで、何かとてつもない（未完）」

沈黙の季節

山屁端・S・瀬賀留（ヤマヘバタ・ステイブン・セガル）は核弾頭を積んだまま暴走する列車に乗り込むことに成功した。このまま列車を止めることが出来なければ何かとてつもない（未完）²

ミドル・ムスタファ―何ですかこれは？³

Little Mustapha―これは「マイクロ・ムスタファ全集」だよ。彼はこれまで訳の解らないことが起きるたびに「これは私の書いた○○を読めば解決しますよ」とか言ってたでしょ。だからボクはそれがどんなものか確かめるために、こっそりマイクロ・ムスタファの部屋に忍び込んで彼の書いた作品をコピーしてきたんだよ。

ニヒル・ムスタファ―でも、これじゃ何が書いてあるのか全然わかんないぜ。

² マイクロ・ムスタファ（自称小説家）は未完の美学を追究しているため小説は全部未完。本当は最後まで話を考える能力がないとも言われている。

³ このへんは脚本風に書いています。

Little Mustapha—そうなんだよね。でもどこを探してもこれより長いのは無かったんだ。これが彼の書いた全てでことだよ。このコピーの元になったものはちゃんと製本してあったんだよ。ビックリしちゃうよね。全集とか書いてあったけど、15ページしかなかったんだ。他の作品も全部未完なんだ。

Dr. ムスタファ—これじゃあ、何にも解決しないなあ。いったいヤツは何を言いたかったんじゃない？

ニヒル・ムスタファ—多分、自分の作った話を聞かせただけじゃないのか？ 普通に話せばいいのに、ヤツはいつももったいぶって話そうとしないのさ。

ミドル・ムスタファ—でもこれじゃあ、もったいぶってる意味がありませんよねえ。事件解決の鍵はどこにも見あたりませんよ。

Little Mustapha—いやいや、それは違うと思うよ。確かに文章になっているのはこれだけだけど、ボクには彼がもつと沢山の情報を持っていると思えるんだよ。これはきつと夢みたいなものだよ。夢というのが無意識と有意識との間をつなぐものだというのが正しければの話だけだね。ここに書かれているのは、彼の無意識の中にあるほんの一部だというところかも知れないよ。

ミドル・ムスタファ—あなたの言っていることも良く解りませんよ。

Dr. ムスタファ—いや、そんなこともないぞ。わたしにはなんとなく理解できる。つまり、マイクロ・ムスタファの頭の中、というか無意識の中ではここにある話は全てちゃんとした話となっていて、普通の人間にも理解できる内容だということだな。

Little Mustapha—まあ、だいたいそんなところかな。

ニヒル・ムスタファ—だいたいなの？ それにしても、どうしてキミは急にマイクロ・ムスタファ全集なんか持ち出してきたんだ？ キミは今年も去年と同じ酒を持ってくるサンタをよぶつもりだったんじゃないのか？⁴

Little Mustapha—始めはそうだったんだけどね。あれからいろいろ考えてみたら、やっぱり本物をよばないといけない、という結論に達してね。だって、本物なら酒もアルト・サククスも、それから三十万のシンセとか百万のレスポールとか何でももらえるでしょ。だってボクはこれまでずっといい子にしていたんだから。だから、今回は本気でいこうと思っただけ。

Dr. ムスタファ—「いい子にしてた」って、キミはもうかなり前から大人なんだが。そこは解っているのかね？

Little Mustapha—肉体的には大人でも精神は12歳だよ。

ミドル・ムスタファ—12歳ですか？ 前は16歳って言ってましたけど、また若くなってませんか？

Little Mustapha—まあ、そうかな。最終的には胎児に戻る予定なんだけど。

ニヒル・ムスタファ—精神年齢が胎児並みって、ぜんぜん訳がわかんないよ。それよりも、話がそれてないか？ このマイクロ・ムスタファ全集についてはどうなったんだ？

⁴ このクリスマスマスの二年前、彼らの元にやって来たサンタは Little Mustapha の手紙が原因で彼らを殺害しようとした。そこで何が起きても大丈夫のように万全の準備をして一年前にも彼らはサンタをよんだのだが、その時にはなぜか酒が大好きな別のサンタが登場した。

Little Mustapha—ああ、そうだったね。つまり彼はボクらが知り得ないことでも知っているかも知れない、ということだよ。それはマイクロ・ムスタファ本人さえも気付いていないことなのかも知れないけどね。本当のサンタを呼べるのは、彼だけかも知れないよ。

このように、ブラックホール・スタジオ (Little Mustapha の部屋) では今年もなにやら陰謀の臭いがしております。そのころサンタの国では……

「おかしいなあ。どうして今年は子供達からのプレゼント・リクエストの手紙がこれだけなんだろう？」

サンタのおじさんが困った顔をしています。思えば、最近はサンタと言えばピチピチギヤルの時代になってしまったからなあ。サンタのおじさんは、街の書店で立ち読みした雑誌のことを思い出していました。サンタのおじさんはグラビアのページに彼と同じ恰好をしたグラビアアイドルの姿を見つけてかなりショックだったようです。

「今の人たちはわしのような老いばれサンタよりも、こんな若くて美しいサンタの方が好みなんだろうか？」

サンタのおじさんは窓の前に立ちました。窓の外はもう日が暮れて真っ暗です。窓ガラスには明るい部屋の中にいるサンタのおじさんの姿がはつきりと写っています。サンタのおじさんは自慢の長い髭を撫でながら悲嘆にくれていました。

何とかしないといかん。このまま、屈辱を味わいながら引退するなんてことは絶対に出来ない。今こそわしの本当の力を見せる時だ。それにしても、子供達からの手紙が二通だけなんて……。いったい何から始めればいいんだ？ まあ、考えても仕方がない。この二通の手紙だけでも、私が完璧な仕事をすれば子供達も私の偉大さに気付いてくれるだろう。

こう考えると、サンタのおじさんの曇っていた瞳に輝きが戻ってきました。窓のそばから離れて今年彼の元に届いた二通の手紙が置いてある机の方向に向かいました。

サンタのおじさんが一通目の手紙のふうを切つて中を読みました。

PSP がほつすい。サンタさん、お願いしますよ。吉男より

サンタのおじさんはこの手紙を読んで、意味が解らずしばらく読んでいる姿勢のまま動くことが出来ませんでした。「昔はこんな手紙の書き方をする子供はいなかったんだけどなあ」

サンタのおじさんは文面にあきれながらも、ある問題に直面していることに気付きました。

PSPって何だ？ サンタのおじさんは眉間にしわを寄せて考え始めました。サンタのおじさんが知っている三文字の頭文字からなる単語はUSDぐらい。サンタのおじさんはこの子供が新しいドラッグを欲しがっているのではないかと思っているようです。或いはPOP（ペンタクルロロフェノール）か？ この子供はダイオキシンを欲しがっているか？ サンタのおじさんの訳の解らない、誤解が続きます。

しばらく考えた後、サンタのおじさんは、ニコリと笑って考えるのをやめました。

「PSPってなんだか解らないけど、こんな子供にはリカちゃん人形とか、モンチッチとかあげとけばいいんだ。逆にその方が喜ぶしな」

良く解りませんが、サンタのおじさんは納得がいったようです。それからサンタのおじさんはもう一通の方の手紙に目を通しました。

驚きました！ ボクも始めは嘘だと思ってたんですけど、もしかすると……って思ってたアクセスしてみ
たんです。そうしたら本当に出来ちゃったんです。しかも相手は本物の女子大生で……

サンタのおじさんは途中まで読んで、手紙をビリビリに破いて暖炉の火の中に投げ捨てました。

「何だ、迷惑メールかよ」

やる気になつてるところへ迷惑メールが来て、たいそうへこんでしまったサンタのおじさんです。

でも、何かがおかしくありませんか？ Little Mustaphaが出した手紙はどこへ行ってしまったのでしょうか？ 二年前に彼がアルトサックスを手に入れるために出したサンタへの手紙はサンタの元へ届いていたのですが、今年はどういう訳か届いていないようです。

その頃、ブラックホール・スタジオでは……

ニヒル・ムスタファ―それじゃあ、キミはまだサンタへの手紙は出してないのか？

Little Mustapha―いや、一応出しておいたよ。マイクロ・ムスタファが必ずしも本物のサンタの居所を知っているとは思っていないからねえ。

ミドル・ムスタファ―でも、その手紙ってどこに出したんですか？ これまでもあなたが出した手紙で本物のサンタが来たことは一度もありませんでしたよ。

Little Mustapha―今回は大丈夫だよ。今年はちゃんとサンタのおじさんのオフィシャル・ホームページに書いてあった宛先に手紙を出しておいたからね。マイクロ・ムスタファが何も知っていなかったとしても、ここへ来るのはかなり信用できるサンタだということだよ。

Dr.ムスタファ―まあ、誰が来るにしても、そいつが危険なヤツだとしたら、わしの開発した超強力電波銃⁵があれば大丈夫だけだな。

ニヒル・ムスタファ―何だよそれ。電撃銃じゃなくて電波銃なの？ それが何の役に立つんだよ。

Dr.ムスタファ―キミは何も解っていないんだなあ。これはかなり危険なものなんだぞ。電波銃というのは超強力な電

⁵ Dr.ムスタファの発明する武器はいつでもトラブルの元。使用する電圧が高すぎるのである。

波を放出して周囲にある携帯電話を壊すんだ。

ミドル・ムスタファ―それは恐ろしいですねえ。

Dr.ムスタファ―そうだろ。恐ろしいだろ。しかも登録してある電話番号とかも全部消えちゃうんだ。

ニヒル・ムスタファ―おいおい、ちよつと待ってくれよ。そりゃ、そんなことが起これば、恐ろしいと思うヤツがいるかも知れないけど、サンタのおじさんっていうのは携帯電話を持っているのか？ オレが考える限り絶対に持ってないと思うんだけど。それに、どうせその電波銃って、ブレーカーが落ちるぐらいの電力を使うんだろ？

Dr.ムスタファ―それは当たり前だ。何せ超強力なんだから。でもバッテリー駆動だから大丈夫だ。この部屋の電気が消えたりはしないよ。

Little Mustapha―バッテリーって言っても、車に積んであるような巨大なバッテリーのことでしょ。ここまで一人で運んでこれないような。

Dr.ムスタファ―…うん。まあ、そういうことだ。

ミドル・ムスタファ―なんだか、自信なくしちゃったみたいですよ。

Little Mustapha―大丈夫だよ。自信なんてあっても無くても同じこと。というより、ある時にはあつて、無い時には無いものなんだから。そんなことより、今年はマイクロ・ムスタファがきつと何かをしてくれる。そんな気がしてならないんだよ。

ブラックホール・スタジオではまた訳の解らない会話が続いています。その頃、エフ・ビー・エルペケファイルの部屋では……って、ここでペケファイル登場なの？ まあ、いいか。この話とペケファイル本編は関係ありませんよ。特別出演です。

F.B.I. (エフ・ビー・エル) ペケファイルの部屋

ペケファイルの部屋のドアが勢いよく開くとそこにはスケアリーの不機嫌そうな表情があった。

「モオルダア。事件っていったいなんですか？」

モオルダアは静かに新聞をスケアリーに手渡した。彼は彼女の機嫌がどうか、事件がどうかはあまり関係がないらしい。モオルダアは趣味で捜査をしているのだから。

「何ですのこれ？ サンタ宛の手紙紛失って。こんなことは、わざわざあたくし達が捜査をする必要があるようには思えませんか」

モオルダアの予想どおりスケアリーは記事の重要性を否定している。でも暇なクリスマスにはもううんざりなモオルダアは、何とかしてクリスマス用の捜査のネタを探す必要があった。

「確かにバカげた事件だよねえ。でもこれは今年が初めてじゃないんだ。二年ほど前から、何者かによってサンタ宛の手紙が盗まれる事件が起きていたんだよ」

そう言うとモオルダアは別の資料をスケアリーに手渡した。それを見るとスケアリーは多少事件に興味をしまったようだった。

「あら、ホントですわねえ。でもこれはきつとバイトの配達員の仕業ですわ。良くあるでしょ。年賀状を配達するのが面倒になったバイトの配達員が年賀状をどこかに捨てていってしまうというのが。どうせ、年賀状なんてたいした意味もないものですし、最近ではインターネットとかありますから、本当に新年の挨拶がしたい人ならメールですればいい

んですわ」

一応興味を示したスケアリーであったが、年賀状紛失事件と同じようにこの事件を片づけてしまった。でもそれではモオルダアは困る。どんな形であれ、今年のクリスマスは忙しくしていたいのだ。

「キミは解っていないなあ。サンタ宛の手紙というのは子供達の夢がつまっているんだよ。社交辞令満載の年賀状とは訳が違うんだぜ」

「何ですか？ 偉そうに。でも、あなたのおっしゃることも否定できませんわね。子供達の夢が託された手紙を盗むなんて許せないことですわ」

モオルダアは何とかしてスケアリーの興味を引くことが出来たようだった。これで今年は、誰に電話をかけてもつながらないクリスマスから解放されそうである。

このようにエフ・ビー・エルは相変わらずなのですが、その頃サンタの国では……。？。？。？。ここはサンタの国なのか？ 限りなくサンタの国に似ていますが、何かが違う。

このサンタの国のようなところのサンタの家のような建物の中でサンタのおじさんのような人が先程から手紙の山をかき分けて、何かを探しています。

「あつた！ あつたぞ！ ヤツらめ、今年は何が欲しいというのだ？」

サンタのおじさんのような人は目を真っ赤に血走らせて、手にした封筒を開けた。あまりにも乱雑に封筒を破ったため、中にあつた手紙も少し破れていたが、彼はそんなことは気にしていないようです。

サンタのおじさんのような人は、しばらく手紙を見つめたまま動きませんでした。やがて口元を引きつらせて、小刻みに顔をふるわせ始めました。それから、彼は突然大声で笑ったのです。彼の頭の中で膨らんだおかしさに耐えられなくなつたのでしょうか。この静かなサンタの国のようなところに、サンタのおじさんのような人の笑い声がこだました。

月のない暗い夜にこの笑い声は不気味な感じでした。外ではトナカイのような動物が一瞬驚いて耳をぴくっと動かしま

したが、彼らには何の危険もない、ということが解ると、トナカイのような動物はまた静かに闇を見つめていました。⁶

58

何日か経って、クリスマス・イブ。ブラックホール・スタジオでは予想どおり Little Mustapha 達が集まっています。

Little Mustapha—おかしいなあ。マイクロ・ムスタファアが来ないねえ。いつもはだいたい時間どおりにやってきてたみたいだけど。

ミドル・ムスタファア—そうですね。影が薄いから、いつもみんなは彼がいることに気付かないんですけど、いたことはいたんですよねえ。今日はせつかく話の中心になれそうなのに。

Dr. ムスタファア—もしかしたら、本当は来てるのにまた気付いてないだけかも知れんぞ。

ニヒル・ムスタファア—先生、それはないでしょ。影が薄いつて言ったつて、透明人間つて訳じゃないんだぜ。でもヤツがいないと変な電話もかかってこないし、留守番電話のランプも点滅してないな。やっぱり鍵を握るのはマイクロ・ムスタファアかも知れないな。

Little Mustapha—どうでもいいけど、マイクロ・ムスタファアに電話してみようか。彼が来ないと始まらないから。

Little Mustapha は電話のハンズフリー機能をオンにして電話をかけた。

⁶ 二年前に Little Mustapha の書いた手紙が届いたのはサンタの国。そこにはサンタのおじさんと大量のトナカイがいた。ここはそのパロディのようなもの。しかし、以前のサンタの国も本物かどうかは怪しいところ。

⁷ ブラックホールメンバーが集まると必ず Little Mustapha の留守番電話には誰も気付かないうちに謎のメッセージが残されていることが良くあるのである。

ミドル・ムスタファア—どうして、わざわざハンズフリーで話すんですか？ 普通に電話すればいいのに。

Little Mustapha—だってハンズフリーって、手がないってことだろ。だから手で受話器を持つたらいけないんだよ。ハンズフリーフォンって言うのはそういうことなんだから。

何を言っているのか訳が解りませんが、全員黙って電話がマイクロ・ムスタファアを呼び出す音を聞いています。

電話機—もしもし、マイクロです。…もしもし？ …もしもし？

一同、黙って電話機の音を聞いています。

ミドル・ムスタファア—ちよつと、これ留守番電話じゃないんだから、誰か話さないと。

Little Mustapha—ああ、そうか。もしもし、ボクだけど。キミ、どうしてまだ家にいるんだよ。もうみんな集まってるよ。

電話機—そうですか。それはすいませんでした。私の方から連絡しようと思ってたんですけど。今日は朝から体調がすぐれないから欠席しようと思うんです。

Little Mustapha—そうなの？ 体調が悪いつて、風邪でもひいたの？ せっかく今日はキミが主役になれそうだったのに。

電話機—そうじゃないんですけど、朝からひどい頭痛と目眩がして。それどころじゃなさそうなんです。でもみなさ

ん、気をつけてください。私には何か嫌な予感がするんです。これが私の頭痛と関係しているのかは解りませんが、もし今日の夜みなさんのところに期待したのと違うサンタがやって来たとしたら、その時には何かとてつもない（未完）

一同―電話も未完かよ！

全員声を合わせて電話につっこみを入れたところで、ブラックホール・スタジオの玄関でチャイムの音がしました。

ミドル・ムスタファ―あれ？ 誰か来ましたよ。

Dr.ムスタファ―もしかしたら、手紙で呼んだ方のサンタがもう来ちゃったんじゃないのか？

ニヒル・ムスタファ―それはないね。まだ夕方だぜ。

Little Mustapha―誰だろう？ 宅急便でも来たのかな？

Little Mustaphaが席を立つて玄関に向かいました。ドアを開けると、なんとそこにはマイクロ・ムスタファがいました。

マイクロ・ムスタファ―いやあ、すいません。遅れました。

Little Mustapha―？？？。遅れましたって、キミは今日来ないんじゃないの？

マイクロ・ムスタファ―何ですか？

Little Mustapha—だって、たった今キミの家に電話したら…。

マイクロ・ムスタファ—私が今家の電話に出られるわけではないじゃありませんか。ここに来るのに急いで歩いていたんですから。

Little Mustapha—そうだよねえ。じゃあ、さっきの電話は何だったんだ？ 確かにキミの声で…。

今年のサンタ話はどんどん怪しくなっていくようです。

話は戻って数日前。サンタの国のようなところの、サンタの家のようなところにエフ・ビー・エルの二人の捜査官がやって来ました。家にはサンタのおじさんのような人の姿はなく、代わりに数人の警察官が家の中をくまなく調べている。

サンタの国のようなところのサンタの家のようなところ

家に入ったモオルダアとスケアリーは、部屋に積み上げられている大量の封筒を見て目を丸くした。あまりに手紙が多いために、部屋の床はほとんど見えない。

「ちよいと、モオルダア。サンタ様への手紙ってこんなに沢山あるんですの？」

「いやあ、これはまだ一部だと思うけどね。他の部屋を探せばまだ沢山あるはずだよ。世界中にはまだ夢見る心を忘れない子供達が沢山いると言うことだね」

「あなたが、そんなことを言うのと嘘つぽいからやめてくださらないかしら？ それにしても犯人はサンタ様への手紙を盗んでどうするおつもりだったのかしら？ 特に中身を読んだような形跡ありませんし。やっぱり犯人はちよつと異

常な方なのかしら？」

この部屋にある手紙はどれも封を切っていないかった。モオルダアにもどうして犯人がこの大量の手紙を盗んだのかが良く解らなかつた。これはクリスマスだけじゃなくて、正月まで忙しくなつてしまひそうだ。でもモオルダアは正月に仕事なんてまっぴらだと思つていたので、何とか手掛かりを見つけたかつた。そこで彼は何も考えずに自分の足下にある手紙の山を崩してみた。すると崩れた下から、乱雑に開けられた封筒が彼の目に入つてきた。

「スケアリー。やっぱり犯人には目的があつたのかも知れないよ」

モオルダアは拾い上げた封筒をスケアリーに手渡した。

「あらいやだ。あたくし、こんな風に乱雑に封筒を開ける人つて許せませんのよ。それよりもこの手紙、差出人は「Little Mustapha」となつていますわよ。これつてもしかして、あなたがいつも言つている、宇宙人とか地底人とかと関係している方の名前じゃありませんの？」

「さあ、それはどうだろう。それはこのサイト自体の大きな矛盾でね、the Pake Files 本編に登場する Little Mustapha と別のところの Little Mustapha っていうのは別人つてことになつてるんだよ。しかも本編を書いている作者が Little Mustapha なんだから、訳が解らないよねえ。でもこの話題を続けてたら話が進まないから、それを気にするのはやめた方がいいんじゃないか？」

「何言つてるのか全然解りませんわ。それよりも、この封筒の中身はどこにあるんでしょうか？ 犯人が持つて逃げたのかしら？」

「それも考えられるし、もしかするとこの大量の手紙の中のどこかに紛れ込んでると言うことも考えられるね。なんだから大変な作業になりそうだ」

スケアリーはこの手紙の海の中から問題の封筒の中身を探すと聞いて、明らかに面倒だという目をしてしたが、モオルダアがなんだかやる気満々なようなので付き合うしかないようだ。

二時間後、モオルダアはまだ手紙を掻き分けていた。スケアリーはもう飽きてしまったようで、家の外で紙コップに入ったホットコーヒーを飲んでいる。代わりに部屋には一人の警官がいてモオルダアを手伝っていた。

「ねえ、モオルダアさん。いったいその手紙には何が書かれているんですか？」

警官が積み上げられた手紙の向こうからモオルダアに聞いた。

「ボクにもまだ解らないけど。犯人はどうしてもその手紙が必要だったに違いないよ。今ボクらが探しているのは封筒から出された紙の方だから少しは見つけやすいけど、犯人は他の手紙と同じような封筒に入っているものを、この中から見つけたさなきやいけなかったんだからね。きつとボクらより何倍も大変な作業をしたことになるね。まあ、運良く一番上に目的のものがあつたなんてことがない限りね。それだけのことをしてまで手に入れたかつたものだから、きつと何かすごい情報が……あつ、あつたぞ！」

モオルダアは手紙を拾い上げてその中身を読んだ。読み終わると、彼は首をかしげて考え込んでしまった。

「何が書いてあるんですか？」

警官が好奇心丸出しでモオルダアに聞いた。モオルダアは何も答えなかった。代わりにスケアリーを読んできてくれと警官に頼んだ。警官は手紙の内容が気になって仕方がないのだが、モオルダアの様子から察すれば大したことも書いてなさそうだ。警官は部屋から出てスケアリーを呼びにいった。

スケアリーは彼女を呼びにいった警官と一緒に部屋に入ってきた。やっぱり警官は手紙の内容が気になるらしい。スケアリーは手にドーナツを持っていた。モオルダアはそれを彼女が自分のために持ってきてくれたのだと思ひ手を差し出して受け取ろうとしたが、それよりも先にスケアリーは持っていたドーナツを自分の口へ運んだ。モオルダアの差し出した手は行き場を失って右往左往。

「モオルダア、どういたしましたの？　なんだか様子が変わすわよ」

「いやあ、何て言うか……疲れちゃつて。へへっ。それよりもキミはさつきから飲んだり食べたりばかりで、そんなことをしたら、また……」

モオルダアはここまで言ったが、スケアリーがムツとしてに気付いて、話題を手紙のことに変えた。

「例の手紙だけどねえ、ちよつと読んでくれないか？」

モオルダアがスケアリーに手紙を渡すと彼女の後ろにいた警官がそれを覗き込んだ。警官はスケアリーの肩越しに手紙

を読んだが、思っていたほど面白いことは書かれていなかった。何だ、ガツカリ。といった感じで警官は部屋を出ていった。しかし、スケアリーは多少の興味を持ったようだ。手紙には次のように書かれていた。

サンタのおじさんへ。

ボク達は今年もいい子にしてみました。つきましてはボク達の望みの物をクリスマスの日にはプレゼントしていただきたい、お手紙を差し上げた次第でございます。ボク達の欲しいのは以下の通りです。

ミドル・ムスタファ：牛の背中から取り出した謎の金属で出来たオモチャ。

ニヒル・ムスタファ：モオルダアが持っているのと同じモデルガン。

マイクロ・ムスタファ：スケアリーがジョギングの時に来ていた汗つきシャツ。(洗ってないやつ)

Little Mustapha：スキヤナー副長官のCD。(あと出来ればウイスキー男の飲んでいるのと同じウイスキー。もつと出来ればアルトサックス)

Dr.ムスタファ：エイリアンの胎児。

それではサンタのおじさん、今年こそよろしくお願いします。

Little Mustaphaより。ブラックホールから愛を込めて。

変な内容だが、そんなところは気にしてられない。手紙には彼らのことが書かれてあるのだ。

「ちよいとモオルダア。なんなんですかこれは？ この手紙を書いた人はどうしてあたくし達の調査した事件のことを知っているんですの？ それに、あたくしの汗つきシャツが欲しいなんて。これは完全に異常者ですわ」

「まあ、それはそうだけど。ボクらの捜査の内容は完全に秘密になっていく訳じゃないからね。どこかのFBIとかを扱っているマニアックな雑誌では、ボクらの記事を真面目に書いている人がいるかも知れないからね。この手紙を書い

※ Little Mustaphaがサンタのおじさんからアルトサックスをプレゼントしてもらおうと思ったことが全ての始まりなのである。

た Little Mustapha が捜査の内容を知っていたとしてもおかしくはないんだが」

モオルダアはスケアリーとは違うところに注目しているようだ。

「ボクが気になっているのは、最後の『エイリアンの胎児』というところだよ。こんな物はこれまでの捜査では登場しなかったよね」

モオルダアの少女的第六感が何かを彼に伝えようとしているようだ。

スケアリーはモオルダアがまた訳の解らないことを言うというのが解っていたが、とりあえず否定するのは彼が何かを言った後にしよう、ということにした。

「ボクが思うに、この手紙を書いた Little Mustapha は何か重要なことを知っているんだよ。しかも、その多くがボクらが関わってきた事件に関連しているんだ。そして、それらを自分の元を集めて何かをしようとしている」

「何かって何ですの？ もっと具体的におっしゃってくださいしないと、何のことだか解りませんわ」

「例えば、実験とか？ まあ、何でもいいか。でも、それを Little Mustapha が手に入れることをどうしても阻止したい人間がいるんだよ。それが、今回の手紙紛失事件の犯人ということだね。サンタがこの手紙を読んで、彼らの望む物をプレゼントする前に手紙を盗んでここまで運んできたに違いない。これだけのことが出来るのはきつと国家的組織がからんでいるのかも知れない。犯人は今頃 Little Mustapha を消すために行動を開始しているも知れないよ。ボクらも急がないと。 Little Mustapha が暗殺されたら、ボクらは重要な情報を手に入れる機会を失うことになるからね」

スケアリーはモオルダアの話聞いていたが、途中からあきれてしまっってほとんど聞いていなかった。

「モオルダア。あなたは どうしていつもそんなことばかりおっしゃるのかしら？ 仮にこの手紙をサンタ様が読んだとして、サンタ様はエイリアンの胎児とかあたくしのシャツとかをこの手紙の人たちにプレゼントすることが出来るのも思っただらっしゃるの？」

「だって、本物のサンタなんだぜ。彼に出来ないことはないよ」

モオルダアが得意げに答えた。

「確かに公認のサンタというのはいますけども。サンタといってもあれはただの人ですよ。」

こんなことを説明するのも面倒だったが、スケアリーはモオルダアの間違いを訂正しようとしていた。それでもモオル

ダアは聞こうとしない。

「サンタが人なのは当たり前だよ。サンタは神様じゃなくて聖人なんだから。それにねえ、スケアリー」
ここで、モオルダアはニヤニヤし始めた。

「もし、この捜査で本物のサンタを見つけれたら、ボクらにもプレゼントの山だけ。欲しい物は何でもプレゼントしてもらえるんだぜ」

「あら、そうですね。それはちよつと良さそうですね」

あらまあ。否定するのかと思つたら、スケアリーまで乗り気になってしまいました。でもスケアリーには一つ聞きたいことがあつた。

「それより、モオルダア。あたくし達のいるこの『サンタの国のようなところ』って、いったいどこなんですか？ 外にはトナカイではない、トナカイのような変な生き物もいますし、まったく気分が悪くなりますわ」

「そんなところを気にし始めたらきりがありませんよ。ここはサンタの国ではないサンタの国のようなところだよ」
そうです。変なところを気にされると話が終わってしまいます。あぶないところでした。

再びクリスマススイブのブラックホール・スタジオ

突然現れたマイクロ・ムスタファを前にしてブラックホールのメンバーは驚いていましたが、それと同時にまた怪しいことが始まったに違いないという不安にかられてもいました。というより怪しいことが起こって欲しいと期待していたのかも知れません。だって、そうならないと面白くありませんから。

D:ムスタファー—いつたいどういふことなんじゃ？ ついさつき家の電話で話していたマイクロ・ムスタファがここに
いるというの？

マイクロ・ムスタファー—いつたいどういふことですか？ 私はずっと前に家を出てここに向かっていたんですけど。

Little Mustapha—いや、それは怪しいぞ。もしかしてここにいるのは変装した偽のマイクロ・ムスタファアかも知れないよ。

Dr. ムスタファア—ああ、あれだな。スパイ大作戦みたいにゴムの覆面で変装するんだな。

ニヒル・ムスタファア—先生、いまはミツシヨン・インポッシブルっていうんだぜ。

マイクロ・ムスタファア—どうでもいいですけど、私は本物ですよ。みなさん、まさか……

マイクロ・ムスタファアが恐れていたとおり、一同マイクロ・ムスタファアに飛びかかり顔中の肉を引っ張ってみました。しかし、ゴムの覆面などはしていませんでした。マイクロ・ムスタファアは顔を真っ赤にして怒っています。

一同——…。

Little Mustapha——…。なんだか、本物だったみたいだね。

マイクロ・ムスタファア—当たり前ですよ！ どうして私が変装なんかしなくちゃいけないんですか。

Dr. ムスタファア—まあ、いいじゃないか。たまにはこういう間違いも起こるんだよ。うへへへつ。

ミドル・ムスタファア—それよりも、ボクが思うには、原因はLittle Mustaphaの書いた手紙じゃないでしょうか？

ニヒル・ムスタファ―それはどういうこと？

ミドル・ムスタファ―今回もまた電話でおかしなことがおきましたよね。考えてみれば、この電話がおかしなことになったのは二年前のクリスマスに私たちがサンタに手紙を出してからなんですよ。

Little Mustapha―そういえばそうだなあ。

ニヒル・ムスタファ―いつたいキミは手紙に何を書いたんだ？

Little Mustapha―どうせ今年もなんにも持つてきてくれないと思ったから、ボクの書いた名作の中に登場する物をいろいろ書いておいたよ。

Dr.ムスタファ―あの変なミステリーか？ そんなことをするからサンタのやつが腹を立ててこの電話にいたずらするんじゃないのか？

Little Mustapha―いやいや、それはないね。手紙の差出人の住所はここじゃなくて近所の公園にしておいたんだ。もしもの時のことを考えてね。そうすれば、また殺人サンタがやって来ても安全だし、本物だったら朝、公園にプレゼントを取りに行けばいいんだ。

ニヒル・ムスタファ―でも、もう変なことは起き始めているんだぜ。ここだって安全だとは思えないけど。去年なんかは向こうから先に手紙を出してきたんだぜ。

マイクロ・ムスタファ―みなさん。いいですか。みなさんは少しサンタにこだわりすぎだとは思いませんか？

Little Mustapha—だって、サンタの話なんだから。

マイクロ・ムスタファ—そうじゃないんです。この電話がおかしなことになるのは、なにもクリスマスの時に限ったことではなかったでしょう。何かのイベントで私たちが集まるたびに妙なメッセージが留守番電話に入っていたんです。覚えていますか？

ミドル・ムスタファ—今ここを読んでいる人にとっては、覚えているとかそういうことよりもまず、読んでいないから解らないと思いますけど。

Little Mustapha—キミは悲しくなるようなことを言うねえ。

マイクロ・ムスタファ—それよりも私の話を聞いてください。私の書いた「探偵の季節」では…

ニヒル・ムスタファ—それならもう読んだからいいよ。

マイクロ・ムスタファ—えっ、いつの間に読んだんですか？ まだ発表されてないはずですけど。

Little Mustapha—裏ルートで密かに入手したんだよ。へへっ。それよりも今回はキミの説をもっと聞かせてもらう必要があると思うんだけど。いったいキミはいつも何が解ったって言ってるんだ？

マイクロ・ムスタファ—それなら、私の考えをお聞かせしましょう。私の考えではこの電話へおかしなメッセージを残していくのは人間ではありません。もっと我々の理解を超えたところにいる何かとてつもない……。あれっ、その

電話のところが点滅しているのって、もしかして…。

ミドル・ムスタファ―また留守番電話ですか!?

ニヒル・ムスタファ―そんなはずはないぜ。きつきマイクロ・ムスタファの家に電話をかけた時には点滅してなかったんだぜ。

Little Mustapha―まあ、とりあえず聞いてみようか。

留守番電話―ゴゴゴゴジュップン。ピーツ。「もしもし、あたくしエフ・ビー・エルのスケアリーともうしますけど。いったいあなた達は何を考えていらつしやるの? あたくしの汗つきシャツが欲しいなんて言っている変態野郎のマイクロ・ムスタファ様はそちらにいらつしやるの? あたくしはそちらに行ってマイクロ・ムスタファ様を懲らしめてやるつもりだったんですけど、なんだか遠くて面倒ですから、同じ変態のモオルダアを殴っておきましたわ! もし来年も同じような手紙を出すのならあたくしは今度こそあなた方のところに行って、皆様を痛い目に遭わせますからね。そのおつもりで。それから、もしあたくしに謝りたいのならあたくしのお屋敷の電話番号は666の…」ピーツ。メッセイジ、オワリ。

Little Mustapha―これはプリンセス・ブラックホール⁹。ではないよね。

ニヒル・ムスタファ―なんなんだ、今のは。エフ・ビー・エルつてキミの書いた話に出てくるところだろ?

⁹ プリンセス・ブラックホールとはゴージャスでセクシーでコケティッシュな大女優(自称)。しかし誰も彼女の姿を見たことがない。これまでブラックホール・スタジオのこのような会合には毎回必ず留守番電話に謎のメッセージを残している

ミドル・ムスタファア―それより、どうしてマイクロ・ムスタファアが変態野郎なんですか？

Little Mustapha―まあ、それはちよつとした手違いかな。へへつ。

Dr. ムスタファア―人間というのは心の奥底ではみんな変態なんじゃよ。そう気にすることもあるまい。

ニヒル・ムスタファア―かつてにみんなを変態にしないでくれよ。それより、これは問題だぜ。まだ留守番電話のランプが点滅してるよ。

Little Mustapha―あつ、ホントだ。なんだかこれはもう聞くしかないね。だんだん盛り上がってきたことだし。

何が盛り上がっているのか良く解りませんが、Little Mustaphaがもう一度留守番電話の再生ボタンを押しました。

留守番電話―ゴゴゴジゴジウゴフン。ピーツ。「もしもし、エフ・ビー・エルのモオルダア特別捜査官だ。もしキミ達がまだ家にいるのなら、今すぐ誰にも気付かれないようにそこから離れるんだ。キミ達の命が狙われている可能性がある。事件の性質上、警察官やエフ・ビー・エルの捜査官をそちらに向かわせることは出来ないんだ。何せ、これって政府の人間が犯罪に関わってるかも知れないんだぜ。すごいでしょ。だから、キミ達の力だけでなんとかそこからなるべく遠くまで逃げて欲しいんだ。それじゃあ、ボクは鼻血が止まらないからこの辺で。あつ、そうだ。連絡はスケアリーの家……」ピーツ。メッセイジ、オワリ。

ミドル・ムスタファア―なんですかこれは？ あなたの書いたエフ・ビー・エルって実在するんですか？

Little Mustapha―そんなわけはないよ。これもサンタのいたずらかなあ？

D.F. ムスタファ―それよりも、命が狙われてるって言ったぞ。逃げなくていいのか？

ニヒル・ムスタファ―先生は臆病だなあ。そんなの嘘に決まってるだろ。

ミドル・ムスタファ―でも気をつけた方がいいですよ。以前は電話が燃えて火事になるところだったんですから。今回¹⁰も何が起ころか解りませんよ。一応どこかへ場所を変えた方がいいんじゃないですかねえ。

マイクロ・ムスタファ―私たちはどこへも逃げられませんよ。

Little Mustapha―なんだか、急に意味深げだねえ。

マイクロ・ムスタファ―みなさんは覚えていますか？ あれも電話が燃えた時でしたね。電話が燃え始める前に留守番電話にメッセージが入って、その時に喋っていた男が言ったじゃないですか。「私の目はどこにでもある。隠れても無駄だ」と。

ミドル・ムスタファ―そう言えばそうでしたね。でもそれとこれが関係しているんですか？

マイクロ・ムスタファ―そうなんです。どこに隠れている人間でも探し出せる人なんかいません。それにこれまで、ここで起こった留守番事件にしてもそうです。我々が電話の前にいるにもかかわらず、我々に気付かれずに電話にメッセージを残すなんて出来ないはずですよ。それが出来るのは多分、我々の五感を越えたところに存在しているもの。

¹⁰これはクリスマスとは関係のない会合での出来事。謎の留守番電話の再生が終わると「スパイ大作戦」のように留守番電話から煙が上がって電話機が自動的に消滅した。

D・ムスタファア―良く意味がわからんなあ。それよりもサンタはどうなるんじゃない？ キミの話を聞けばプレゼントはもらえるのか？

マイクロ・ムスタファア―さあ、それはわかりませんが。私の話を聞けば私たちの助かる可能性は高くなると思いますよ。

ニヒル・ムスタファア―助かる可能性って、オレ達はそんな危険な状態にあるのか？

Little Mustapha―どっちでもいいけど。面白そうだから聞いてみようよ。ビールでも飲みながら。ちなみにビールは一本ずつね。二杯目からはウォッカかウイスキーでね。今年も大量に用意したから。

マイクロ・ムスタファア―それどころじゃないんですけど……。まあ、聞いてくれるのならそれでいいです。でもいざというときにはちゃんと行動を起こせるようにしておいてくださいよ。

このように、なぜか今回は良く喋る¹¹マイクロ・ムスタファアが事件に関して話を始めたようです。いったい彼は何を知っているのか？

その頃、誰もいないはずのマイクロ・ムスタファアの部屋では。

薄暗い部屋の中からカリカリと何かを削るような音が聞こえてきます。電気を消した部屋の中にある机に誰かが座っています。机の上に置かれた小さな電球が照らし出したのは、なんとここにはいないはずのマイクロ・ムスタファアです。

¹¹ 普段のマイクロ・ムスタファアは居るのか居ないのか解らないぐらい無口なのである。

た。

彼は鉛筆を握って原稿用紙に何かを書き続けているのですが、鉛筆の芯が折れてしまっているので何が書いてあるのか解りません。しかし、彼は一心不乱に書き続けます。よく見ると恐ろしいことに気付きました。彼は白目をむいて開けっぱなしの口からはよだれさえ流しています。

悪魔か何かが彼に取り憑いて彼に何かを書かせているのでしょうかと思えません。原稿用紙には何が書かれようとしているのか？ それに、今 Little Mustapha の部屋にいるマイクロ・ムスタファは？ ここで何かを書き続けているマイクロ・ムスタファは偽物？ それとも……。

静かな家の中に折れた鉛筆で何かを書き続ける音が絶え間なく聞こえてきます。それから時々、彼がのどの奥の方から絞り出すような声でかすかな音でつぶやくのが聞こえました。あまりに小さな音で、果たしてそれが彼の声なのか、それとも他の何かの出す音なのか良く解りません。その声はこう言い続けていました。

「笑え……笑うのだ……なぜ笑わない……笑え……笑うのだ……なぜ笑わない……」

後編に続く¹²

¹² 'Black-hole' では話が長すぎるといふことで、前編と後編にわけました。ここでは次のページからが後編です。

埋め立て地にある大きな公園

クリスマスイブだといふのにとんでもないことが起きてしまったようだ。この公園の付近には何十台ものパトカーがやって来ていた。公園全体が事件現場として一般の人間の立ち入りは禁止されている。

そこへモオルダアとスケアリーが到着した。いつもなら彼らがエフ・ビー・エルだと言って事件現場に入ろうとしても警官には意味が伝わらずに一苦勞するのだが、今回彼らは特別出演なのでそんなところに時間をかけてはいられません。ここはすんなり事件現場に入れたことにしましょう。

現場に入った瞬間からモオルダアが目を向けられる場所はどこにもなかった。彼の大嫌いな酷たらしい遺体がそこら中に転がっているのだ。モオルダアは無意識のうちにスケアリーのコートの裾をつかんでいた。強がってお化け屋敷に入った方がいいが、入ったら怖くなつて泣き出しそうな子供のようである。さすがのスケアリーもこの現場の様子に驚きを隠せなかったのか、しばらくはモオルダアが怖さのあまり彼女のコートをつかんでいるのに気付かなかつた。しかし、それに気付くと彼女はパシッとモオルダアの手を叩いて払いのけた。

「いったいこれはどういうことですか？」

「地獄ですよ。これは地獄です」

モオルダアはパニックに陥って何を喋っているのか自分でも解っていない。

「ちよいと、モオルダア。しっかりとしてくださいな。せつかくのクリスマスだというのに、どうしてこんな気分の滅入る大量殺人事件の捜査なんかしなくちゃいけませんの？」

スケアリーの声の調子で彼女がいらついていることに気付いたモオルダアは、ハッとして我に返った。彼にはスケアリーを怒らせることが何よりも怖いことだと充分に解っていた。

「これだけの人間が殺されるなんてちよつと普通じゃないよね。でもそれだけじゃボクらの出番とはならないよねえ。それは警察の仕事だから。でも、目撃者がサンタだと言うことが解ったんだ。しかもそのサンタを調べたら、銃を持っていることが解って捕まったってことだよ」

「じゃあ、犯人はそのサンタの恰好をした人だということのかしら？ それで、あたくし達の捜査している事件とはどんな

関係があるって言うんですの？ もったいぶらないで話していただけませんかしら」

「キミはこの住所をしってる？」

こう言つてモオルダアはサンタ宛手紙紛失事件の証拠品である Little Mustapha の書いた手紙をスケアリーに見せた。

「あらまあ、ここはその手紙に書かれていた返信先ですか？ それじゃあ、さつき捕まったサンタ男が手紙盗難の犯人でことじゃないかしら。そうならあたくし達の捜査は終了ですわ」

「それはどうかな。ここで起きた殺人は彼の犯行じゃなさそうだよ。この遺体は頭がつぶれていたり、内蔵が飛び出していたり。銃を持っている男がそんな殺し方をするわけがないからね」

モオルダアは考えに集中するあまり無意識のうちに遺体を眺めていたが、ふと自分が見ているものがなんであるかに気付いた。彼はキャツと変な叫び声をあげて、またスケアリーのコートをつかもうとした。スケアリーはさつと身をかわしてそれをよけた。

「それから、もう一つありますわねえ。あなたみたいな言い方をすれば、これはあなたがこのまえ言っていた政府の闇組織による犯行でもなさそうですわね。そういうところの人間ならこんな派手な殺し方はしませんから」

モオルダアが遺体を見てまたパニックになってしまったのでスケアリーがモオルダアの言うべきことを喋った。

「そう、そう。そういうことだよ。それよりも早くここを出ようよ」

恐さに耐えきれなくなったモオルダアはスケアリーを引っ張つて急いで公園の外に向かった。

「ちよいと、なんですの。あたくしが遺体の様子を調べないと事件のことが解らないじゃありませんか」

「いや、それはいいんだよ。あんな所にいたらボクがまともに会話が出来なくて話が前に進まないだろ」

「それはそうですけど、もしあの遺体の中に Little Mustapha 様の遺体があつたらどうするんです？」

「それはないと思うよ。Little Mustapha は自分があなることを恐れてわざと違う住所を書いてあつたんだと思うぜ。公園の外にきたモオルダアはだいたい普通に話せるようになってる。」

「それよりも、犯人はどんな方なんですの？ ちよつと異常な方かしら？ でもこの殺し方は、何て言うか猟奇殺人の域を超えていますわ。こういうのって何て言うのかしら……」

「ジェイソンみたいだろ？」

スケアリーはこのモオルダアのおバカな意見を否定したかったが、あながち間違いとも言えなかった。犯人はもの凄い腕力で、出会う人を次々と機械的に殺していったかのようだ。

「もしかすると犯人は人間ではないかも知れないな」

「ちよいと、真面目にやってくださりませんか？ 人間ではないってどういうことですか？ またエイリアンとか地底人とかが出てくるんじゃないでしょうねえ」

「いや、それよりもっと恐ろしいかも知れないよ。それに根拠だつてちゃんとあるよ。キミは紛失したサンタ宛の手紙が見つかったあのサンタの国のようなところの謎は解けたのか？」

「・・・それは、まだ解つていませんけど。あれはきつと映画のセットみたいなのですわ。実際にあたくし達はそこにいたんですから、あのサンタの国のようなところが実際にあることは確かですわ」

いったい二人は何を話しているのでしょうか？ 実は紛失した手紙を見つけてから帰ったあと二人は手紙を見つけた家について調べていたのです。家に住んでいた人間が解ればすぐに犯人は見つかると思つたようです。しかし、サンタの家のようなところに住んでいた人間の記録はどこにもありませんでした。それよりもそこに家があつたという証拠もありませんし、サンタの国のようなところというのでも世界中どこを探してもないのです。

始め彼らは何かの理由で幻覚でも見たのではないかと思つていましたが、彼らの手元にはあるはずのない場所で見つけてきた Little Mustapha の手紙がちゃんとあるのです。この謎を解くために二人が悩んでいるところへ今回の公園での連続殺人が起こつたのです。

「キミは作家の予知能力については知つてるかな？」

「なんですのそれ？ 予言とかそんなやつですか？ そんなものはインキに決まっていますわ」

「そうじゃなくて、作家の書いた事件がまったく関係のないところで実際に起こつたり、そういうことがあるんだよ。つまり話が現実化するんだ」

「そういうのは、話が現実になったんじゃないやありませんわ。作家というのはあり得ることを書くものですから。それに、そういう話を書けるのが作家の感性ですわ。世の中を見る目が鋭いんですのよ。それから、作り話をまねた犯罪という

のもありますわ。まったく、最近では小説といえば中身は犯罪だらけですからイヤなことですわ。あたくしはもつと美しいものが読みたいんですけども」

「まあ、それはどうでもいいけどね。ボクの説をキミが言うように片づけてしまうと簡単だよ。でもこの社会を動かしているのは個人の意志ではないよね。社会を形成している集団の意志だ。でもその集団は個人から成り立っている。作家の作品は社会自体に影響を与えないけど、個人には影響を与えることが出来る。個人が集まって社会が出来ているのなら、作家の書いたことが社会を動かしていると考えることも出来るんだよ。作家に影響された個人からなる集団の意志によって書いたことが現実化されるんだ。でも今回の事件の場合はそれとはちよつと違うね。ボクの考えでは途中の部分が省略されているんだ。この事件の鍵を握る誰かの想像が、個人や社会を通り越してそのまま現実のものになったとしか考えられないよ。その人物はきつと頭の中で今回の事件のような話を思いついたに違いないと思うんだよ。キミはサンタの国のようなところの出てくる話なんて知らないだろ？ でも実際にボクらはそこに行つて手紙を見つけてきた。そのことやここで起きた恐ろしい連続殺人を説明するのには、こう考えるのが正しいと思うよ」

モオルダアはこう言うのと得意げにスケアリーを見たが、そこにスケアリーはいなかった。彼女はモオルダアの屁理屈を聞くのが面倒だったようで近くの自動販売機であたたくい缶コーヒーを買つて戻つてくる場所だった。

「もう言いたいことは言い終わりましたの？」

「うん、まあ・・・」

「どうでもいいですけど、あの捕まったサンタに話を聞いてみませんか？ その方があなたの話を聞いているよりもよっぽどましですわ」

彼らが話しているすぐそばにはパトカーが止まっていて、中には捕まったサンタの赤い服が見えた。

「それじゃあ唯一の目撃者に話を聞いてみようか」

モオルダアはなんだか納得がいかないまま、スケアリーとそこへ向かった。

なんだか、後編の出だしはほとんどthe Fake Files'になつてしまいました。でもこれはBlack-holic'なので、そろそろ彼らに出てきてもらわないと。

ブラックホール・スタジオ (Little Mustapha の部屋) へは Little Mustapha 達が酒を飲みながらマイクロ・ムスタファアの話聞いていました。

ミドル・ムスタファア—つまり、あなたが言いたいのはこのことですね。これまで起きた変な事件は全てが誰かの想像の中にあつたことで、何らかの理由でそれが実際に起こってしまったのだと。そういうことですね。

マイクロ・ムスタファア—そういうことです。

ニヒル・ムスタファア—なんだよ。想像の話なら別に怖がることはないじゃないか。

D: ムスタファア—そうだなあ。わしも心配して損したぞ。

マイクロ・ムスタファア—いや、そうじゃないんです。これまでは、心配する必要はなかったんですけど、今回はそうもいかない気がするんです。今その恐ろしい想像は実体を持ち始めているような気がするんです。

Little Mustapha—なんだか、オカルトじみてるなあ。本来ならそれはボクの領分だぞ。

マイクロ・ムスタファア—まあ、そういわずに聞いてください。これまでの電話事件や実況中継事件¹³で、謎の声は一方的に喋るだけでした。でも今日あなた達は電話で家にいないはずのボクと話しているんです。つまり対話をしたんです。これはきつと想像の中のものか実体を持ち始めた証拠です。想像が自分自身の考えを持ってあなた達と電話でやりとりをしたんです。

¹³ 実況中継事件—この時には留守番電話ではなく、どこからともなく聞こえてくる声が彼らに謎のメッセージを告げた。それはまるで野球中継の最後のほうの実況と同じように、次に続く番組の開始時間が遅れることや、途中ですがあと一分少々で中継を終わらせる、といったものであった。

ミドル・ムスタファア—なんだか怖そうな感じだけど、その恐ろしい想像が実体を持つと何が起こるって言うんですか？

マイクロ・ムスタファア—「想像を絶する恐怖」です。以前にどこからともなく謎の音が聞こえてきた時に言ってたでしよ。きつと犯人はずつとこの時を待っていたんです。実体を得るチャンス。

Dr. ムスタファア—それじゃあ、わしらは何をすればいいんじゃない？

マイクロ・ムスタファア—それはまだ解りません。

Little Mustapha—なんだ、わかんないのか。

ミドル・ムスタファア—ガツカリしちゃいますね。

Little Mustapha—それじゃあ、そろそろこの話はやめにして、なんかしようか。

Dr. ムスタファア—なんかしようにも、わしはもう話を聞くのに疲れてなにもする気になれんよ。

ミドル・ムスタファア—それじゃあたまにはテレビでも見ましようか。ここってテレビあるんですか？

Little Mustapha—あるよ。映るかどうかはわかんないけど。

Little Mustaphaがテレビをつけるとそれはちゃんと映るようでした。そこには彼らの良く知っている公園が映し出

されていました。

Little Mustapha—あれ。ニュースであの公園が出てる。なんだか殺人事件みたいだよ。

一同、テレビの前に集まってきました。

ニュースのリポーター—只今わたくしは事件現場のすぐ近くにやって来ています。たった10分という時間で三十人もの人間を無差別に殺害した犯人の消息は未だにつかめておりません。警察では付近の住民に厳重な注意を呼びかけています。

ニュースキャスター—リポーターの屁端（へバタ）さん。短時間で三十人も殺害したということですけど、事件当時の様子などは解っていませんか？

リポーター—唯一の目撃者とされているサンタの恰好をした男がいるのですが、現在変な二人に事情聴取されていて我々が話を聞くことはできません。

キャスター—そうですか。その変な二人とは？

リポーター—なんだか知らないけど、変な二人です。

キャスター—はあ、そうですね。それで、現在の現場の様子なんですけど、どのようになっていますか？　へバタさん。

リポーター—はい。現場は遺体がドロドロでグチャグチャです。

キャスター—あの、へバタさん。もう少し解りやすくお願いできますか？

リポーター—なんだか、あの辺からガーってなって、ビーってなって、もうバーって感じですよ。以上、現場からへバタがお送りしました。

キャスター—へバタさん。あんた大丈夫ですか？

画面からボキャブラリーの少ないリポーターの姿は消えたのですが、そこには依然として現場付近の様子が映され

ていました。ブラックホールのメンバーもさすがに驚いた様子でこのニュースを見ていました。画面の後ろの方にはエフ・ビー・エルの二人がサンタに話を聞いているのが小さく映っていました。

事件現場

モオルダアとスケアリーがパトカーの後部座席に座っているサンタの恰好をした男に声をかけた。

「サンタさん。我々はエフ・ビー・エルのモオルダアとスケアリーです。少しお話を聞かせてもらいたいのですが」
モオルダアがサンタの恰好をした男に声をかけると、男はニコニコしながら二人の方を見た。

「なんだねキミ達は。警察じゃないのか？ わしは何もしていないんだよ。頼むから放してくれんかのう？ 今年はその仕事が少ないから、この公園で暇つぶししてただけなんじゃよ。それなのに警察はわしを犯人扱いじゃ」
「そりゃあ、本物の銃を持っていれば捕まるのは当たり前ですよ。それよりもあなた、その付け髭はとつたらどうなんでしょう？」

スケアリーはこのサンタの恰好をした男を疑っているようだ。しかし、モオルダアはそうでもない。

「スケアリー、これは付け髭じゃなくて本物の髭だよ」

そういうとモオルダアは男のもじりもじり生えた髭をぐいと引っ張った。

「こら、若僧！ 何をする。わしの大事な髭を！」

サンタの恰好をした男がモオルダアを怒鳴りつけた。モオルダアはビックリしてつかんでいた髭を放した。

「ああ、これは失礼。あなたはこんな髭まではやして、もしかしてプロのサンタさんですか？」

「サンタにプロもアマチュアもない。あるのは本物と偽物だけじゃ」

「どうでもいいですけど、あなたはどうして銃なんか持っていたんですの？ これだけでも十分に犯罪ですから、あなたは相当の刑罰を受けることになりますわ。それにここで三十人を殺したのがあなたということなら、あなたは死ぬまで刑務所ということですよ」

クリスマスだというのに仕事にかり出されたスケアリーはかなりカリカリしているようだ。誰でもいいから犯人にして

早く帰りたい。そんな感じだ。

「お嬢さん。この銃は護身用に持っているんじゃないよ。二年前のクリスマスに変なやつらに襲われてね。それ以来、いつでも銃は持ち歩いているんじゃないよ。それよりも、キミ達はわしの見たことを聞きに来たんじゃないのか？」
そうでした。このサンタのおじさんは容疑者になる前は目撃者だったのですから。

「そうですよ。サンタさん。あなたが見たことを教えてください。ここの公園で何があったんですか？」

「ほう、キミはわしのことをサンタと呼んでくれるんじゃないよ。けっこうなことだ。それじゃあ、話してやるとするか。・・・」

わしは今年も子供達にプレゼントを配るためにはるばるやってきたんじゃないが、何しろ今年は渡すプレゼントがたつたの一つしかなかったんじゃない。ゆつくり来たつもりだったんじゃないが、それでも着くのが早すぎてしまっただけ。それでこの公園で暇つぶしということになったんだ。わしの他にも若いもんが沢山いたね。それにしても最近の若いもんというのはクリスマスだというのにベタバタ、ベタバタ。いつの間にかクリスマスは子供達のものから大人のものになっちゃったのかいなあ？ まあ、そんなことはどうでもいいかのう。

それで、わしが特に何をするでもなくベンチに座ってボーっとしてるとな、わしの座っているベンチから芝生を挟んだ反対側のベンチのほうから悲鳴が聞こえてきたんじゃない。悲鳴といってもそれはすぐに止んでしまったがな。アッという間にその悲鳴をあげた人は殺されちゃったようだ。

わしが見るとそこには、まあ二メートル以上はありそうな大男の姿があつたんじゃないよ。おかしいことにな、その大男はわしと同じような恰好をしてたんじゃない。それは、こんな風に赤と白の生地で作られた服をな。

大男は最初に悲鳴が聞こえた場所から隣のベンチに移ったんじゃない。そこには若い男女がいたんじゃないが、さっき隣のベンチで起こったことを見て、すっかり怯えていたようだね。二人ともガタガタ震えながら動けなかったようなんじゃない。腰が抜けたというのはいかんな状態なんじゃない。二人は大男が自分たちの前にやって来るのをじっと見守っていた。

¹⁴つまりこれが Little Mustapha 達である。彼らはサンタのおじさんのプレゼントの入った袋をふんどくろうと計画していた。しかし襲われたと言っているサンタのおじさんもある勘違いから Little Mustapha 達の暗殺を計画していた。

大男は二人の前に来るとなんだか訳の解らないことを聞いてたなあ。たしか「ここにLittle Mustaphaはいるか?」とか、そんなことを聞いておった。大男を前にした二人はその質問を聞いていたのか、怖くて何も解らなかつたのか知らないが黙って大男のほうを見ていたんじゃない。すると、大男は顔色一つ変えずに腕を上げると男の髪の毛をつかんで男の頭を引き抜いちまったんじゃない。それから、隣の女に向かってこういったんじゃない。「なぜだ、なぜ笑わない?」ってな。女が黙っていると大男は引き抜いた男の頭で女のほうを殴ったんじゃない。それで女のほうも倒れたきり動かなくなっちゃった。

それからは、公園は大パニックじゃったよ。公園のベンチでちくりあっていた男女達は、この恐ろしい大男に気付いて公園中を逃げ回っていたんじゃないがな、大男はまるでそいつらがどこに逃げるかを知っているかのようにヤツらの先に待ちかまえているんじゃない。それからさつきと同じじゃよ。大男が「ここにLittle Mustaphaはいるのか?」と聞いて、答えられない相手を次々に殺していったんじゃない。そりゃあ、恐ろしい光景じゃったよ。

サンタの恰好をした男はこのように話していたが、モオルダアには一つ腑に落ちないことがあった。

「どうして、あなただけ助かったんですか? もしかして、女の人といちゃついてなかったから助かったの?」

モオルダアが言っているのはどつかの映画にでてきた「ホラー映画のセオリー」だ。

「なんだ、若僧。キミはわしのことをサンタさんと呼ぶから解っていたのかと思っただけだな。わしは本物のサンタなのじゃよ。サンタは普通の人間と違うからあんな殺人マシーンと化した大男なんかには殺されないんじゃない」

「えっ、ホントに。あなたがサンタさんなんですか?」

モオルダアが驚いているとスケアリーがモオルダアを引っ張ってパトカーから遠ざけた。

「ちよいと、モオルダア。あんな怪しい方の言うことを信じるんですの? あんなのB級ホラーを見すぎた人の作り話ですわ」

「おっ、キミはあの話聞いてB級ホラーだと思ったのか? キミもけっこうなホラー好きじゃないか。……まあ、話自体はそんな感じではあるけどね。でも、この事件現場の状況から判断すると、ここではB級ホラーのような殺人事件が起きたとしか思えないんだけどね」

「確かにそうですけども、これを見てくださらない？」

スケアリーはサンタの恰好をした男の持つていた白い袋からモンチッチの人形を取り出した。

「なんだこれ？　これが今年の唯一のプレゼント？　なんでこんなものを？　ボクだったら迷わずPSPだけどね」

「そうでございましょう？　今時、クリスマスプレゼントにモンチッチはありませんわ。あたくしが思うにあのサンタの恰好をした男は妄想癖があるんですわ。きつと自分のことをサンタクロスだと思いきんで……」

「でも、さっきの話までも妄想だとは言えないだろう？」

スケアリーはモオルダアに反論する代わりに、サンタの所へ行つて質問をした。

「ちよいとあなた。このモンチッチですけど、これは誰にプレゼントするつもりでしたの？」

「ああ、それか。それは吉男君へのプレゼントじゃ。本当はPSPが欲しいとか書いてあつたんじゃがのう。わしの考えではPSPなんてものは子供には有害なものじゃからな。モンチッチにしたわけだよ。オーホッホッ」

サンタの恰好をした男はなぜかここでサンタ笑いをあげた。スケアリーはあきれて振り返った。

「モオルダア、これはあなたへのプレゼントみたいですよ」

そういうとスケアリーはモオルダアにモンチッチを渡してスタスタとパトカーのそばから離れていった。そのあとをモオルダアがモンチッチを手にして追いかける。

「ねえ、スケアリー。いったいどうしたんだ？」

スケアリーは始め何も答えなかったが、モオルダアがしつこく聞いていると彼に言った。

「あたくし本当に腹が立ってきましたから、あたくしが犯人を捕まえてしまいますわ。きつとここの殺人犯とサンタの手紙を盗んだ犯人は同一人物に違いありませんから」

スケアリーは何に腹を立てているのか、モオルダアにはまったく解らなかったが、多分スケアリーは早く帰りたいだけのようにだ。

「捕まえるつて、いったい誰を捕まえるんだ？」

「あの大男に決まつてるでしょ。あなたもそれがお望みなんでしょ？　ジェイソンみたいな大男を追いかけるのが」

「それは、それで面白いけどね。ボクはあのサンタが何かもつと重要なことを知っているような気がするんだよ」

「それなら、あなたはあのサンタとホラー話で盛り上がってればいいんですわ。あたくしは、あたくしのやり方で事件を片づけてしまいますから」

スケアリーは車に乗り込むとどこかへ行ってしまった。まさか帰っちゃったのか？ モオルダアは少し不安になっていた。

その頃、ブラックホール・スタジオでは。

ミドル・ムスタファ―これって、すごくやばいことになってるんじゃないでしょうか？

Little Mustapha―そうみたいだね。ボクが手紙に書いた公園で大量殺人事件だつて。

D: ムスタファ―いつたいキミは誰に手紙を出したんじゃない？ 去年もその前もこんな恐ろしいことは起きなかったぞ。

ニヒル・ムスタファ―先生、そんなことを気にしてる場合じゃないよ。オレ達はいま危険な状況にあるんだぜ。

マイクロ・ムスタファ―そうです。とても危険な状況です。でも、みなさんは気付きませんか？

ミドル・ムスタファ―何をですか？

マイクロ・ムスタファ―いいですか。以前に謎の声は言いましたよね。「私の目はどこにでもある」と。もしそうなら、あの公園に殺人鬼は現れなかったはずです。何でも見通せる目があるのなら、あそこに我々がいないのは解るはずです。つまり、真つ直ぐに我々の元へやって来て我々を恐怖のどん底に陥れていたことでしょう。でもそれが出来ないというのなら、我々にも助かる見込みはあるはずです。きっと我々の命を狙っているものは実体を与えられて、全てを見

通せる力を失ったのではないかと思うのです。以前は誰かの想像だったものは、どこにでも行くことが出来たのです。そして、全てのものを見ることが出来た。しかし、一度実体を与えられてしまうと、それは我々と同じような状態しか動けないし、我々と同じようにしか物事を見ることが出来なくなるんですよ。

Little Mustapha—なんだか、今回のキミは嘘みたいに頼りがいがあるねえ。

Dr.ムスタファ—それで、わしらはどうすればいいんだ？ キミには何か考えはあるのかね？

マイクロ・ムスタファ—いや、それはまだ何とも言えません。でも出来る限りの準備はしておいた方がいいでしょう。いずれあの殺人鬼は我々を見つけるでしょうから。

ミドル・ムスタファ—準備といつても何をすればいいんですか？ 三十人も殺したんですよ。我々がかなう相手とは思いませんが。銃でもあれば別でしょうけど。

Dr.ムスタファ—銃ならあるじゃないか。良いヤツが。

ニヒル・ムスタファ—先生、まさか電波銃とか…。

ニヒル・ムスタファのいうことは聞かずにDr.ムスタファは嬉しそうに外へでて玄関前に置いてあった電波銃を取ってきた。

マイクロ・ムスタファ—まあ、電波銃も何かの役に立つかも知れません。

Little Mustapha—じゃあ、ボクはもう一本のウイスキーを開けちゃおうかな。

ニヒル・ムスタファ—それは、なんの役に立つんだ？

Little Mustapha—酔っぱらったら、ボクの実体がなくなる感じだろ。そうなら実体を持った恐怖の殺人鬼よりもボクのほうが強いってことだから。

ミドル・ムスタファ—あなたはさつきから相当飲んでましたけど、まだ酔ってないんですか？

Little Mustapha—まあ、酔ってはいるけど実体がなくなるほどではないねえ。

ニヒル・ムスタファ—でも実体がなくなるって言うのはキミだけが思ってることだろ？ キミがいくら酔っぱらってもボくらにはちゃんとキミが存在しているものとして認識されているんだぜ。

マイクロ・ムスタファ—それはそれで、いいのかも知れませんが。とにかくみなさんが思いついたことは何でもやった方がいいですよ。私の考えでは、この相手には普通のやり方は通用しないはずですから。

ミドル・ムスタファ—そうですか。それじゃあ、私は何をしようかなあ？

ニヒル・ムスタファ—こういう時には何をしたらって無駄なのさ。

D: ムスタファ—おい、みんな！ 大変だ。

一同—なんですか？

D: ムスタファ—今、わしの電波銃を試してみたんじゃがなあ、ちよつとしたミスがあつたようでバッテリーでは動かないようなんじゃ。

ミドル・ムスタファ—それじゃあ、またコンセントから電源をとつて使うんですか？

ニヒル・ムスタファ—それはダメだよ。またブレーカーが落ちて大変なことになるに決まつてるぜ。

D: ムスタファ—それは、大丈夫だよ。この電波銃は超普通から超強力まで出力が変えられるようになってるんじゃ。超普通ならブレーカーは落ちんよ。

なんだかブラックホール・スタジオはあわただしくなってきました。その頃、もう一人の怪しいマイクロ・ムスタファがいたマイクロ・ムスタファの部屋では。

部屋では相変わらず芯の折れた鉛筆で何かを書いている音がしていました。鉛筆を握る力はだんだん強くなつていようで、もう何も書かれていない原稿用紙はビリビリに破けていました。それでもガリガリという音が絶え間なく続いています。原稿用紙がおかれていた木製の机は鉛筆で引つかかれたために塗装が剥げて、所々生の木がむき出しになっていました。

その時、絶え間なく動いていた彼の手が急に動かなくなりました。それでもまだ書き続けようと鉛筆を握る手に力を入れたよう、その手は小刻みに震えていました。そしてとうとう握る力に耐えられなくなった鉛筆は乾いた音を立てて二つに折れてしまいました。

「誰だ！ 私の邪魔をするのは！」

彼は顔を上げて誰もいない部屋で叫びました。そこにいたのはマイクロ・ムスタファではありませんでした。マイクロ・ムスタファの面影は残ってはいたのですが、その顔を見てマイクロ・ムスタファだと言える人は誰もいないでしょう。色白だった彼の顔は固まった血のような赤黒い色をしていました。頬の肉は何日も遭難していた登山者のようにほとんどなくなつて、骨と皮だけのようです。それでも目だけはギラギラと輝いていました。この顔に角が生えたら、誰でもこれを悪魔と呼ぶに違いありません。

「誰も私の邪魔をすることは出来ないのだ！」

その悪魔がそう叫ぶと、締め切った部屋に突風が吹きました。部屋中に散らかっていた原稿用紙が舞い上がってその悪魔の頭上を舞っています。すると次の瞬間ぴたつと風が止み机の上には新品の原稿用紙が置かれていました。悪魔の手には新しい鉛筆が握られています。その鉛筆で悪魔はまた一心に何かを書き始めました。

事件現場付近の住宅街

先程からスケアリーの運転する車がこの住宅街を行ったり来たりしている。どうやらスケアリーはちゃんと殺人鬼を捜しているようでした。時折、家の周りにクリスマス用のイルミネーションをつけている所があると、スケアリーはクリスマスに自分を捜査にかりだしたモオルダアに対する怒りを抑えるのに苦労していた。それでも、先程の事件現場の様子を思えば、それはなんとか押さえることが出来た。あそこにいた被害者達はもつとひどい目に遭っていたのだから。

スケアリーは事件現場のことを思い出して、あそこで何が起きたのか考え始めた。あのサンタの恰好をした男が言っていたようなことが本当に起きたのでしょうか？ 一人の人間があれだけのことをすることはまず不可能である。しかし、それをやったのが人の想像を超えたものだとしたら？ そんなものは彼女一人で捕まえることが出来るのだろうか？ いや、それはあり得ないことだ。スケアリーはサンタ男やモオルダアの言っていたことを頭の中から消そうと必死になっていた。「だって、あたくしは科学者ですから」

スケアリーの車は薄暗い住宅街の中でも特に人気のない所にやって来た。ここで彼女は車の速度を更に落として辺り

を注意しながら慎重に進んでいった。この辺なら犯人が一時的に身を隠すのにはちょうどいい。

スケアリーはふと時計に目をやった。時刻はもう零時を過ぎていた。それを見て彼女は車を止めた。「はあ、クリスマスイブが終わってしまいましたわ……」スケアリーはつまらなそうに時計を眺めていた。その時、彼女は車のライトが照らす暗い道の先を誰かが横切ったように感じて、あわててそちらに注意を向けた。道の先は十字路になっているようだ。スケアリーがそこへ向かって再び車を走らせようとした時、彼女は女性の叫び声を聞いたように感じた。

スケアリーは慌てて車のエンジンを止めて、窓を開けて耳を澄ましてみた。何も聞こえてこない。しかし、このまま何もせずにいるわけにもいかない。もしかするとこの先の十字路を曲がった先ではまた先程の公園のように恐ろしい事件が起きているかも知れないのだ。スケアリーは銃を取り出すと、静かに車のドアを開けた。

彼女がおそろおそろ車から降りようとしている時、彼女の携帯が鳴った。さすがのスケアリーもこの電話の音には驚いたようだ。彼女はビクツツと体を震わせてから電話に出た。電話をかけてきたのはモオルダアだった。

「ちよいとモオルダア。いったい何なんですか？ 今、ちょうど話が盛り上がってきた所なんですのよ。邪魔するのはやめてくださらない？」

盛り上がってきた、とか言われても何のことだか解らない。モオルダアはなんだか気まずそうに話し始めました。

「ああ、それはすまなかつたねえ。それより、キミ今どこにいるんだ？」

「あたくしは、ちゃんと犯人を探して付近の住宅街を捜索中ですのよ」

「そうなのか。それなら、キミ。気をつけた方がいいよ。犯人はきつとその辺にいるはずなんだ。さつきサンタのおじさんから聞いたんだけどね、サンタのおじさんは Little Mustapha を知っていたんだよ」

「知っていたって、それはどういうことなんですの？」

「ボクが例の手紙を見せて、何か知っていることはないか？ と聞いたら、なんとサンタさんは二年前に Little Mustapha から偽名で手紙を受け取っていたことが解ったんだよ。その時サンタさんは実際に Little Mustapha、その時には妄蔵と名乗っていたらしいけど、その家に行ったららしいんだ。そこでサンタさんは数人の男達に囲まれて危険な目にあっらしいんだよ」

「それはいったいどういうことですか？ 犯人は Little Mustapha だと言っているの？」

「いやいや、そうじゃなくてね。それより Little Mustapha の家っていうのは多分、今キミがいる場所の近くだと思うんだよ。公園の殺人鬼も Little Mustapha を探していたんだから、彼もきつとその辺にいるはずなんだ。殺人鬼は会う人みんなに Little Mustapha の場所を聞いてみたいからね。一人ぐらい知ってる人がいて教えたかも知れないよ。今ボクはそっちに向かつてるんだけど、犯人はとっても恐ろしいヤツだからね、ボクが行くまでキミは一人でヤツを捕まえようなんてしちゃダメだよ」

「あなたが来たって何の役にも立たないんじゃないんですの？ それにあたくし、ついさつき怪しい人影を見つけたんですのよ。これから、ちょっと調べてきますから。あなたも来るんなら、早く来てくださいませ」

スケアリーは電話を切ると、車を降りて前方の十字路へ向かった。

スケアリーが十字路を曲がるとその先には男女が倒れていた。近づいてみると二人は確認するまでもなく、すでに息絶えているようだった。男のほうはうつぶせに倒れていたのだが顔は上を向いている。殺人鬼に首をねじられたのだろう。頭が後ろ前を反対にしているかのようだった。それから、男の腕がなくなっていた、その腕は隣に倒れている女性のほうの胸に突き刺さっていた。またホラーじみていますわ。スケアリーはそう思いながら二人の遺体のそばにしゃがんで、状況を詳しく調べようとした。その背後から人影が近づいていることにはまだ気付いていないらしい。

その頃ブラックホール・スタジオでは。

ミドル・ムスタファ―ホントに大丈夫なんですか？ 準備といっても、Dr. ムスタファの電波銃と Little Mustapha が酒を飲んでるだけじゃありませんか。

ニヒル・ムスタファ―そうだぜ。キミは何でも知ってるような感じで話してたけど、結局は何にも解ってないんじゃないのか？ それじゃあ、キミの未完の小説と変わらないじゃないか。

マイクロ・ムスタファ―まあ、そういわずに聞いてください。私だって何でも知っているわけではありませんよ。答え

というのはいつだって曖昧なのですから。それに、相手はこれまで我々が何をしようと、我々のすることを知っているかのような口調で話してたでしょう。それなら、我々も何もしてはいけませんよ。つまり、これから我々が何をしても、その結果何が起こるかということを知っているとはいけないと思うんです。相手はきつと人の考えを読むことが出来るのかも知れません。公園であれだけの人間が殺されて誰も逃げられなかったのも、被害者達がどこへ逃げようとするのかを読んで殺人鬼が先回りしてたからだと思うんですよ。Dr.ムスタファアの装置を使えば何が起こるか解らない。それから、Little Mustaphaが酔っぱらえば何を言い出すか解らない。そこに鍵があるとも思えるのです。

Little Mustapha—おいおい、何を言うんだよ。ボクはいつだって理にかなったことを言ってるじゃないか。

ミドル・ムスタファア—それはどうでしょうか？

Dr.ムスタファア—どうでもいいが、危険が迫っているのに、ただ待っているだけなんていうのは良くないんじゃないのか？ わしは何かしてないと今にも電波銃を超強力モードで発射してしまいそうだよ。

ニヒル・ムスタファア—それだけはやめてくれよ、先生。

Little Mustapha—それじゃあ、これはどうだろう？ もう一度マイクロ・ムスタファアの家で電話をかけてみるのは。その謎の人物が実体化しているとしたら、電話に出ている間はマイクロ・ムスタファアの家にいるわけだから、いつまで経ってもここへはやって来られないってことでしょ？

ミドル・ムスタファア—それはそうですけど、もし彼が電話に出てもいつまで話すつもりですか？ 永遠に電話し続けるんですか？

Little Mustapha—「まあ、どうでもいいけど、面白そうじゃん。やってみる価値は…」

Little Mustaphaが電話の受話器を取ろうとすると恐ろしいことに気付きました。一同、それに気付いてお互いの顔を見合わせていました。

ニヒル・ムスタファ—「また留守電にメッセージが入ってるみたいだぜ。」

Little Mustapha—「聞いてみようか？」

ミドル・ムスタファ—「怖いけど、そうするしかありませんかね。」

Little Mustaphaがおそろおそろ留守番電話の再生ボタンを押しました。

留守番電話—「レイジジュウサンフン。ピーツ。「やあ、ブラックホールの諸君。今年もなにやら盛り上がっているようじゃないか……」

留守番電話からは彼らの聞き慣れた低く抑揚のない声が聞こえてきました。以前から彼らの元へ留守番電話で謎のメッセージを残してきた声です。この声これから何を話し始めるのか？一同、息を殺してメッセージの続きを聞きました。

二人が殺された現場

しゃがんで遺体の様子を調べているスケアリーの後ろから忍び寄ってくる影に彼女はまったく気付いていなかった。目の前にある遺体の異常さに驚いてそれどころではないのだ。その間も人影は彼女のほうへどんどん近づいてくる。そして彼女のすぐ後ろまで来ると、彼女の前にその人物の影が出来た。その時ようやくスケアリーは背後の人間の存在に気付いたようだ。しかし、気付いた時には何者かの手が彼女の肩の上に置かれていた。スケアリーはとっさにその手をつかむと、それをねじり上げてそのまま肩越しに投げ飛ばした。彼女の後ろにいた人物は空中で一回転して背中から地面にたたきつけられた。そこに横たわっていたのはモオルダアだった。

「やあ、スケアリー。 Little Mustapha の家の場所が解ったから向かっていたらキミの姿が見つかったもんでね」
モオルダアが倒れたまま、彼の顔を覗き込んでいるスケアリーに向かって話している。

「あー、イヤだ。モオルダアでしたの？ 夜道でいきなりレディに触れたりするもんじゃありませんわ」
スケアリーはモオルダアの手をつかんで彼が起きあがるのを手伝った。

「それから、今あなたが振り返ると後ろにはあなたの苦手なグチャグチャの遺体がありますから、気をつけてくださいね」

「何を言っているんだ？ ボクが遺体を怖がってるなんて、あり得ない話じゃないか」
とは言っているがモオルダアは決して振り向こうとしない。

「それよりも Little Mustapha の家がどうのこうのって、言つてませんでした？」

「ああ、そうそう。 Little Mustapha の家はこの道のすぐ先にあるんだ。ここで人が死んでいるってことは、殺人鬼はもうすぐ Little Mustapha の家に到着している頃かも知れないよ。ここは警察にまかせるとして、ボクらは急いで Little Mustapha の家に向かわないと」

「あら、それは大変ですこと。早くしないと」
モオルダアは遺体が視界に入らないように慎重に振り返ってから道の先へと走り出した。そのあとをスケアリーが追っていく。

再びブラックホールスタジオ

留守番電話―レイジジュウサンフン。ピーッ。「やあ、ブラックホールの諸君。今年もなにやら盛り上がっているようじゃないか。今のうちにせいぜい楽しむがいい。キミ達は私のことが少し解ってきたような気がしているのだろうか？フッフッフッ。そんなことではいつまで経つても私の真の姿を見ることはないだろうね。でも今夜は特別に、キミ達のために底なしの恐怖を用意しておいたよ。まあ、これでキミ達が私に会うことは絶対になくなったということだな。それではブラックホールの諸君。最後の夜を存分に楽しみなまえ。それじゃあ。今から突撃しま〜す！」

ミドル・ムスタファ―最後のフレーズつて永世十段のまねですかね？

Little Mustapha―ちよつとネタが古いよね。

Dr.ムスタファ―それよりも、今玄関で何か物音がしなかったか？

ニヒル・ムスタファ―先生も臆病だなあ。この電話にまた謎の留守番電話が記録されてたつてことは、ヤツがまた実体のない存在に戻ったつてことなんじゃないのか？ それならもう何も・・・

ニヒル・ムスタファがここまで言った時、玄関の扉がもの凄い勢いで吹き飛んで、同時に玄関の周囲にあったものとばされたドアにぶつかつて壊れる音がしました。

「うわあ、来たー！」

一同、大パニック状態で思い思いの場所に隠れました。ミドル・ムスタファはダンスの影に、ニヒル・ムスタファとDr.ムスタファは押入の中。Little Mustaphaとマイクロ・ムスタファは一つ奥の小さな部屋に逃げ込みました。

玄関にはサンタの恰好をした大男がいました。しかし、その大男はなかなか中に入つてこようとはしません。とい

うのも口。ムスタファはドアが吹き飛んだ時に驚いて電波銃を超強力で発射していたので家の中は真っ暗だったからです。大男がドアを蹴破ったと同時に家の中が暗くなったことと、ブレーカーが落ちるまでのほんの一瞬ではあったのですが電波銃から発せられた超強力電波がこの大男に何らかの影響を与えたのかも知れません。

それでも大男は慎重にゆつくりと中へ入ってきたようです。この大男は目的のためにしか行動しないようです。Little Mustaphaを見つめるまで殺しまくる、という目的です。

暗い部屋の中でじつとしていたLittle Mustaphaですが、しばらくして暗闇に目が慣れると隣にマイクロ・ムスタファがいることに気付きました。マイクロ・ムスタファが思いのほか落ち着いた表情だと言うことも解りました。

「ねえ、これちよつと、やばいんじゃないの？」

Little Mustaphaがマイクロ・ムスタファに聞きました。

「こうなったら、なるようにしかありませんよ。それより、あなたはもうちよつと酒を飲んだ方がいいんじゃないですか？」

「何を言うんだ、こんな時に。いま向こうの部屋に戻ったら、恐ろしい殺人鬼に殺されちゃうよ。でも、そんなことしなくてもこのままじゃみんな終わりだよ。こうなったのもみんな本物のサンタが来ないからいけないんだ。このまま、向こうの部屋に隠れてる人から順に殺されていくんだ。それで最後にボクも殺されてこのコーナーもこのホームページも終わりになっちゃうんだよ。そうなったら、書きかけの話とか作りかけの曲とか解決しないままじゃないか。こうなったらここで、いろんな話の結末言っちゃおうかな。いや、ダメだ。それは出来ない。ここは前向きに考えてボクだけ奇跡的に生き残るといふことで考えていこう。まあ、他のメンバーがいなくなったら、ちよつとやりづらくなるけど、それはそれでいいや。問題はこういう場合、恐怖の殺人鬼は生き残ったボクを狙ってまた現れるはずなんだ。ホラーっていうのはそうやって続編が作られるわけだから。って、ボクはこの期に及んでいったい何を考えているんだ？」

一人で喋っていたLittle Mustaphaですが、ふと我に返ってマイクロ・ムスタファのほうを見ました。マイクロ・ムスタファは静かに微笑みただけでした。今にも恐怖の殺人鬼がやってくるという時になぜかマイクロ・ムスタファは落ち着いています。Little Mustaphaはこのマイクロ・ムスタファの様子を見て思わず彼の腕にしがみつきたいと思ったのですが、それはちよつとやめておきました。

Little Mustapha はまた黙って、恐怖の殺人鬼が隣の部屋にいる他のメンバーを片づけてからこの部屋にやってくるのを待つしかありませんでした。他のメンバーがどこに隠れているのかわかりませんが、臆病なD・ムスタファとニヒル・ムスタファはきつと押入に隠れたのだろうと考えました。それから、ミドル・ムスタファは反射神経が鈍いからモタモタとタンスの影にでも隠れたのだろう。ということは最初はミドル・ムスタファが殺人鬼の餌食でしょうか？

Little Mustapha はおそらく最初に聞こえて来るであろうミドル・ムスタファの悲鳴をただ待つしかありませんでした。しばらくの間、ゾツとするような静寂が辺りを包んでいました。その中で恐怖の殺人鬼がゆつくりと隣の部屋に近づいてくる足音が聞こえた気がしました。このあと、最初に見つかったミドル・ムスタファが恐怖におののいて悲鳴をあげるに違いありません。Little Mustapha は両手で耳をふさぎたい気分でしたが、そんなことは無駄なことには思えませんでした。どう考えてもこれで終わり。そんな気がしたのです。

するとその時、意外な音が聞こえてきました。隣の部屋からミドル・ムスタファの「ハハハッ」という笑い声が聞こえてきたのです。これはどうしたことでしょうか。それから、今度は押入の障子をもの凄い勢いで開ける音が聞こえました。そして一瞬、間を開けてから、今度はD・ムスタファとニヒル・ムスタファがゲラゲラ笑う声が聞こえてきました。「あまりの恐怖に頭がおかしくなったに違いない」Little Mustapha は隣の部屋で笑声がしても少しも安心できませんでした。もしかするとこれは恐怖の殺人鬼がLittle Mustapha に聞かせている彼だけにしか聞こえない笑い声なのかも知れません。Little Mustapha は黙って狭い部屋で身を縮めていました。

今度はLittle Mustapha の隠れている部屋のドアが開けられました。そこには大きな男の姿がありました。闇に目が慣れたといつても、Little Mustapha のいる場所からその殺人鬼の顔までは見えませんが、彼がサンタのような帽子を被っていることは解りました。

恐怖の殺人鬼はゆつくりとLittle Mustapha のほうへ近づいてきました。近づいて来るにつれて、その殺人鬼の顔は窓から入ってくる月明かりに照らされて次第に明らかになってきました。そして、殺人鬼はLittle Mustapha の前に立ち止まるとその顔をLittle Mustapha の前に近づけてきました。Little Mustapha はその顔をよく見ることが出来ました。それはこれまでに見たこともないような恐ろしい顔だと想像していたのですが、Little Mustapha はその顔を見ると思わず吹き出しました。やつぱり、さつき聞こえてきた他のメンバーの笑い声は本物だったようです。

恐怖の殺人鬼は彼らの反応にかなり困っているようでした。

「なぜだ？ なぜお前らは笑うのだ？ このオレを見て怖くないと言うのか？」

「そりゃそうだよ」

Little Mustaphaが笑いながら答えます。

「何でサンタがピエロなんだよ？ サンタだけでも十分に面白い恰好なのに、更にピエロのメイクって言うのはちょっと反則だよ。しかも困った顔が更に面白い」

彼の言うとおり、サンタの恰好をした殺人鬼はピエロのメイクをしていました。ブラックホールのメンバーは時々こういうミスマッチをたまらなく面白いと思ってしまうようです。彼らを恐怖のどん底に突き落とすためにやって来たのに、そこまで言われると恐怖の殺人鬼も黙ってはいられません。人を笑わせるキャラクターが大量殺人をするというギャップを怖がらせるといのが殺人鬼のねらいだったのですが、彼らには通用しなかったようです。そこで彼は、目を血走らせて唇を裏返らせると尖った歯をむき出しにしました。それは誰彼かまわずに吠え立てて噛み付こうとするたちの悪い番犬のような形相でした。

「ならば、これでもまだ怖くないと言うのか？」

そう言うど恐怖の殺人鬼は拳を振り上げると、Little Mustaphaの横にいたマイクロ・ムスタファにその拳を振り下ろしました。その拳はマイクロ・ムスタファの胸を突き抜けて体の中にめり込んでいました。Little Mustaphaは驚いて声もあげられずその様子を見ていました。

「さあ、どうだ。これでも笑えるというのか？ さあ、笑って見ろ」

そう言いながら恐怖の殺人鬼はマイクロ・ムスタファの体にめり込んだままの腕を持ち上げてマイクロ・ムスタファごととLittle Mustaphaの目の前にかざしました。やっぱりこれは恐怖の殺人鬼だったのか？ 再び絶望的な気分になったLittle Mustaphaが思っているど意外なことがおきました。

恐怖の殺人鬼の腕の先にぶら下がっているマイクロ・ムスタファが突然声をあげて笑い出したのです。

「なぜだ？ これのどかが可笑しいというのだ？」

恐怖の殺人鬼はさすがに動揺を隠し切れません。彼の腕がマイクロ・ムスタファの胸にめり込んで、もうマイクロ・ム

スタッフアは息絶えていると思ったのにマイクロ・ムスタッフアは笑っているのです。マイクロ・ムスタッフアは笑いながら言いました。

「恐怖の殺人鬼君。今回はキミの負けだよ。おとなしく家に帰るがいい」

マイクロ・ムスタッフアがそう言うのと彼の胸にめり込んでいた殺人鬼の腕が次第にマイクロ・ムスタッフアの体の中に引き込まれていきました。始めはゆっくりだったその動きが次第に速くなって、見る間に殺人鬼の体はマイクロ・ムスタッフアの体の中に吸い込まれていきました。

Little Mustaphaと隣の部屋からこの様子を見ていた他のメンバーは何が起きているのか解らず、ぽかんと口を開けたままこの様子を見守っていました。すると次の瞬間マイクロ・ムスタッフアの体が光に包まれました。これまで暗い部屋の中にいたLittle Mustapha達はこの光に思わず目を閉じました。そして次に目を開けた時、それまでマイクロ・ムスタッフアのいた場所には、彼らが見たことのない老人がいました。老人は光の中で満足そうな笑みを浮かべています。「なんなんだよ、これは？」

Little Mustaphaが思わずつぶやきました。光の中の老人をよく見ると背中には羽が生えていました。老人は腰に布を巻いている以外ほとんど裸で、羽を使って中に浮いているようでした。一応、腰に布を巻いてややこしい部分は隠しているつもりでも、浮かんでいるためにLittle Mustapha達にはその辺は丸見え。気になって仕方がない。驚いているLittle Mustapha達を見てその老人は大きな声で笑いました。

「オーホッホッ。キミ達には意外かも知れないがね。わしが本物のサンタなのだよ。本物のサンタというのは羽の生えた老人なのだよ」

老人に、丸見えだということに注意しようとしていたLittle Mustaphaだがその一言を聞くと急に本来の目的を思い出したようだ。

「あなたが本物のサンタさんですか？ それじゃあ、ボクに……えーっと」とつきに欲しいもの考えたが、欲しいものがありすぎてすぐに出てこない。

「プレステ、じゃなくってプレステ・ツー、じゃないや。ピーのほう、というか楽器もいろいろ欲しいんだけど……」何を言っているのか解りませんが、彼らの前に浮かんでいるサンタさんはそんなことは気にしていないようです。

「オーツホツホ。オモチャをプレゼントするのはオモチャメーカーが考えたサンタじゃよ。わしは今年、キミ達に特別なプレゼントをしたつもりなんじゃが、それがなんだか気付かなかったかのう。まあ、いい。いつかキミ達にも解る時が来るじやろう。オーホツホツ」

そう言うときサンタ老人は天井をすり抜けて天空へと昇っていった。そんなことより、サンタ老人、丸見えだよ。ややこしいところが。

Little Mustapha達はなんだか納得しきれないような感じでサンタ老人を見送りました。

「これで解決なんですか？」

ミドル・ムスタファアが聞くと他のメンバーが同時に答えました。

「多分ね……」

その時、モオルダアとスケアリーは……

Little Mustaphaの家のすぐ近くにやって来た二人は、家のドアが壊されているのを見つけて急いで家の前まで走ってきた。

「手遅れだったのかしら」

スケアリーが銃を取り出してからモオルダアに言った。モオルダアも彼のモデルガンを取り出して答えた。(どうしてスケアリーが本物の銃を持っていてモオルダアがモデルガンなのかは‘The Pike Files’本編を読んでくれたまえ)

「さあ。彼らがどこかに避難してくれていればいいんだけど」

二人がゆつくりと家に近づくと、彼らの頭上がパッと明るくなった。二人が驚いて上を見上げると、Little Mustaphaの家の上空に老人が浮かんでいた。

「モオルダア。何ですのあれは。あの方は隠しているつもりでしょうけど、ここからでは丸見えですわ」

モオルダアがその老人を見ながら答えた。

「ああ、そうだねえ。見事な横チン。いや、下チンだな」

そう言っている間に光に包まれた老人は空高く舞い上がってそのうちに見えなくなってしまう。辺りには夜の静寂が戻ってきたようだった。二人は黙って銃とモデルガンをしまった。

「あれはいったい何なんですか？」

スケアリーが聞いた。モオルダもなんだか良く解らなかったが、何か言わないといけない感じだ。

「あれはきつと本物のサンタかも知れないね。でも夜空に発行物体が現れてそれが瞬く間に消えてしまう時には、大抵ボクらの捜査は謎のまま終わるんだよ。あとはファンが勝手に想像するしかないんだよ」

「ファンって、いったい何のことですか？ あたくし達のファンなんて今のところ一人もいませんのよ」

「ああ、そうなの？ でも、まあいいじゃん。真実はどこにもないってことだよ」

明け方

マイクロ・ムスタファの部屋ではもう何も動いていません。静寂が辺りを支配しているようです。この静けさの中では、何者かの立てる寝息が良く聞こえてきます。先程まで悪魔が座っていた机ではマイクロ・ムスタファが顔を伏せて眠っていました。机に向かって何かをしているうちに疲れ切って眠ってしまったかのようです。

部屋は閉め切つてあつたのですが、どこからか風が吹き込んできました。ゆつくりと静寂の中を進むその風は、マイクロ・ムスタファの髪に当たって幽かに彼の髪を揺らしました。

マイクロ・ムスタファはゆつくりと目を開けると、時計に目をやりました。

「あれ、もう朝になつてる。私は Little Mustapha の部屋に行く予定だったのに。今回は私が主役になるはずでしたが、いったい私は何をしていたんだ？」

マイクロ・ムスタファはまだ半分眠っているような目をこすりながら考えていました。

「確か、昨日私は新作を書くためにここに座つたんだ。それは確か、昼過ぎだったと思うのだが。それから私はどうなったのだろうか？」

マイクロ・ムスタファは机の上にある原稿用紙を調べてみました。そこには「主役の季節」とタイトルだけ書かれてい

ました。マイクロ・ムスタファはしばらく考え込んでいました。

「私はこのタイトルだけを考えると、疲れ切つて眠ってしまったのか？ それにしてもこの疲れ方は尋常じゃないな。きつとこれは次の作品の良いネタになるかも知れない。次は『疲労の季節』というのを書こう。それよりも、今の私にはもつと睡眠が必要なようだ。Little Mustaphaには起きてから連絡することにしよう。それにしても彼らはサンタには会えたのだろうか？ まあ、今回は主役になるはずの私がいなかったのだから無理だったのだろう。もし私ぬきで彼らがサンタに会えるとしたら、その恐ろしさは何かとてつもない（未完）」

布団に潜り込んだマイクロ・ムスタファはここまで考えるとまた眠りについたようでした。

その頃 Little Mustapha の部屋では。

昨晚の出来事のためにブラックホールのメンバーは誰一人眠りにつくことが出来なかつ……、と思つたら、一同床に寝ころんでいびきをかきながら眠っています。どうやらあの事件の後、Little Mustapha の提案で酒盛りが始まつたらしく、結局いつものぐたぐた飲み会になつてしまつたようです。そこでは性懲りもなくどうすればサンタにプレゼントをもらえるのが話し合われたとか、合われなかつたとか。かなりの量を飲んだ彼らですから、目を覚ました時には昨晚の出来事が事実なのか夢の中の出来事なのか解らなくなつていようでしょう。

そんな中、玄関で誰かが戸を叩く音が聞こえてきます¹⁵。

「ごめんくださいまし！ あたくしですのよ。ごめんくださいまし！ あたくし、プリンセスなのよ〜」

Little Mustapha はこのドアを叩く音に一瞬目を開けたが、目を覚ましたのは肉体だけで頭はいつまでも寝たままのようでした。彼は一度寝返りをうつと、またすぐに眠つてしまいました。

「ちよいと、みなさん。いらつしやるんでしょ。昨夜、急に仕事が入つてしまつて遅れましたけど、今年はみなさんの所にちやんとやつてきましたのよ。ちよいと！ ごめんくださいまし！ あたくしプリンセスなのよ〜」

¹⁵ 書いてる時には気付きませんでした、この戸は恐怖の殺人鬼によって壊されてたんですね。長い文を書く時はこういうところに注意が行かなくなつてしまいがちです。

中からは何の反応もない。

「もう、せつかくやつて来たのに。失礼しちゃいますわ。こんなことならこんな薄汚い家には来ないでセレブの集まるパーティーに行けば良かったわ。もう来年は来てあげませんかからね。プン！」

玄関の前にいた女性は怒って帰ってしまいました。それにしてもこの、プリンセスというのは……。まあ、それほどでもないか。¹⁶

エフ・ビー・エルに提出されたモオルダアとスケアリーの報告書より

恐怖の殺人鬼の消息は依然つかめないままだが、クリスマススイブの夜以降に犯行は行われなかったようだ。だいたい、あんな恐怖の殺人鬼が出てくるなんて話はペケファイルではあり得ないのだが、まあ今回は特別出演ということでのその辺は気にしても仕方がない。でもボクの優秀な捜査官の第六感がボクに伝えるところによれば、犯人はきつと来年も現れる。そんな気がしてならない。(Written by モオルダア)

まったく、気が滅入ってしまいますわ。あたくしがわざわざクリスマスパーティーをキャンセルまでして捜査をしたというのに、犯人の行方が解らないままなんていうのは許せませんわ。それから、あのサンタの国のような所っていうのは何なんですか？ あんなことを書くから話の意味が解らなくなってしまうんですのよ。それに、今回は人が殺されすぎだと思いませんか？ これじゃあ、また更に作者の人格が疑われるに違いありませんわ。あたくしは、作者様がそんなことばかり書いてこのサイトが削除されても知りませんからね。

あと、ペケファイルの本編が全然更新されなくなってしまうましたわね。きつと作者はあの話の続きを考えていないに決まっていますわ。もつと真面目にやっつけてくださらないといけませんわ。

あたくしは来年のクリスマスに殺人鬼が現れたとしても、もう捜査にはいかないつもりですから。クリスマスにはセ

¹⁶このプリンセス・ブラックホールが登場シーンについて、ファンの間ではスケアリーとプリンセス・ブラックホールが同一人物なのではないか？ という噂が流れた。……ところで、ファンっているのか？

レブの集まるパーティーに出席しないといけないんですから。(Written by スケアリー)

報告書を読んでいたスキヤナー副長官は大きくため息をついた。

「どうして、今回はオールスターでお送りします¹⁷って書いてあったのに私が登場しなかったんだ？」
スキヤナーが前の壁のほうをむいたままつぶやいた。その疑問に後ろで答えるものがいた。

「そうだよねえ。私も不思議に思ってるんだよ。この私でさえ登場しなかったんだから」

声のするほうを見るとそこには、男が座っていて絶え間なく手に持ったウイスキーのボトルをラップ飲みしていた。二人の目が合うとこのウイスキー男は不気味な微笑みを浮かべてから静かに立ち上がると、そのままドアを開けてどこかへ行ってしまった。

特別付録 “Santa’s End” Little Mustapha

¹⁷そう書かれていたのはホームページの更新情報のコーナー。そんなところに文句をつけられても困ってしまいます。